

378
136

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁶ 11 12 13 14 15

始



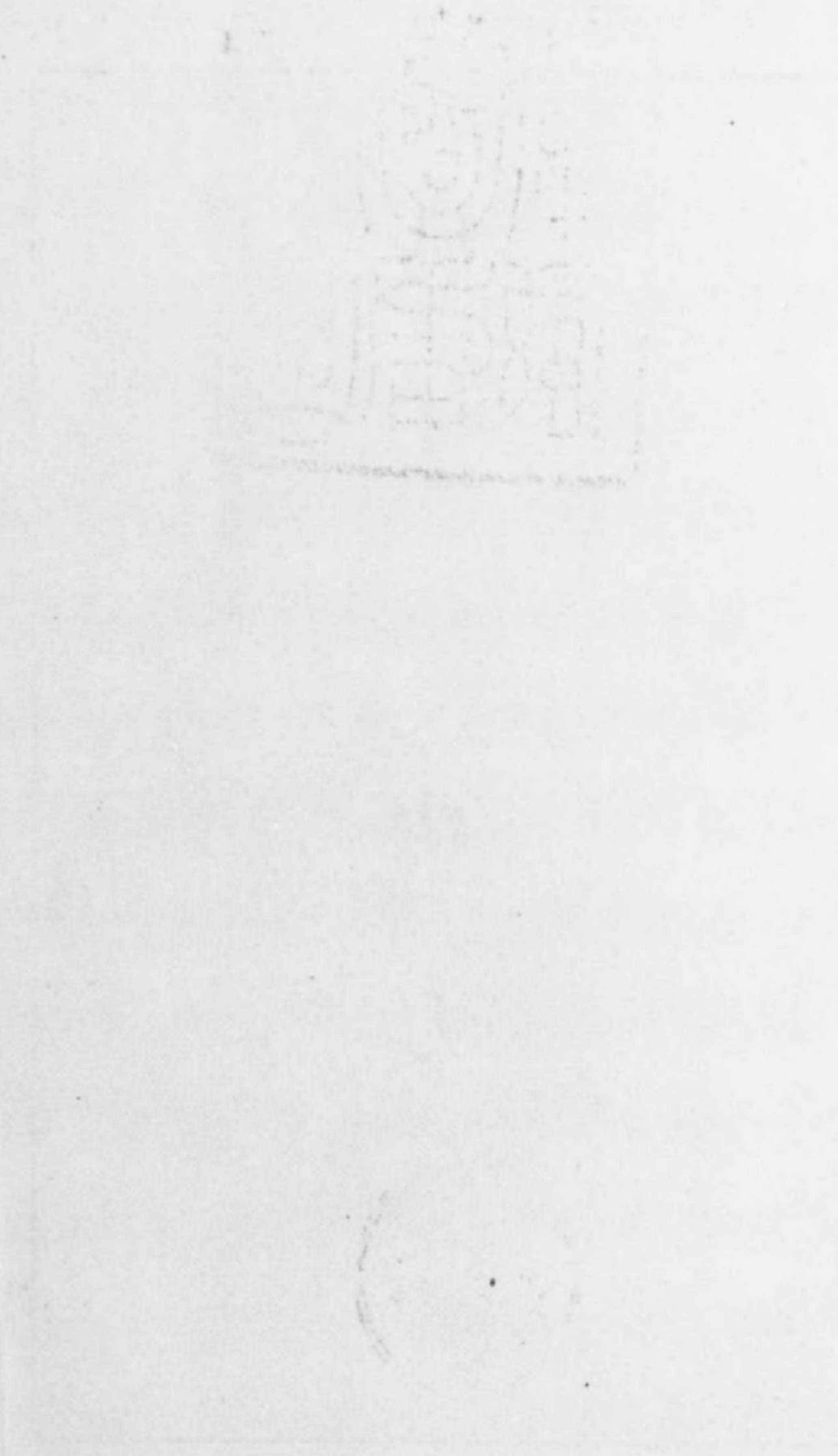
特 275
119



菅
勇
著

妙
法
の
功
力

正
信
會
刊



帝 祝 化

長生書

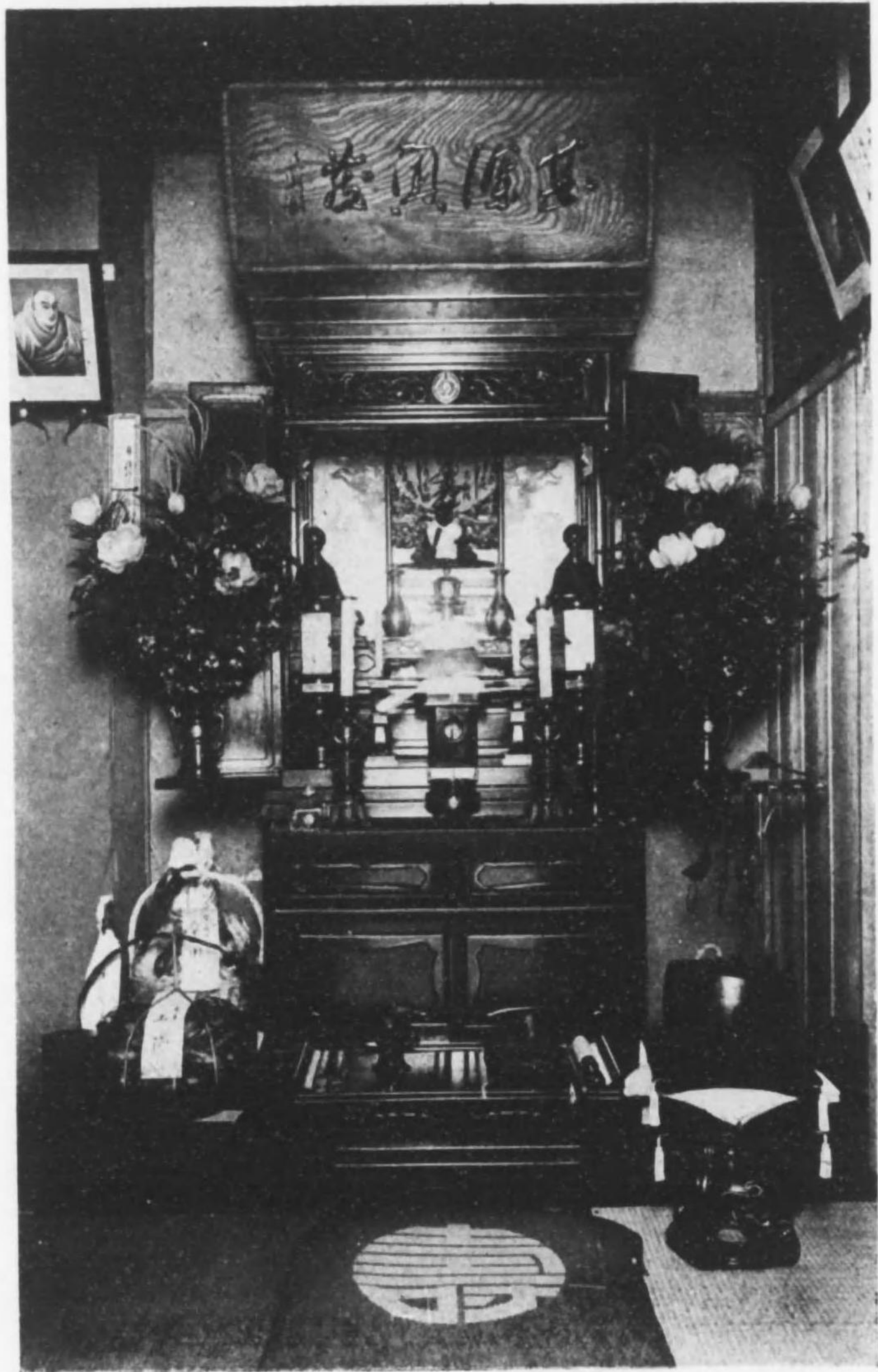




像御の人聖蓮日祖宗



尊 本 御



壇 戒 御

序

今を去ること十有餘前、圖らずも不治の難患に冒されて病床に仰臥すること二年、
灑然くだう求道ほつしんの一念に發信して、自我を捨て、謗法を抛ちて始めて言ひ知れぬ法悦に浴し、
廣大無邊なる法華經の御利益を頂き、再生の御恩を蒙りてよりこのかた、日夜行學の
二道を勵みつゝ、いよ／＼法華經の尊さ有り難さを體得して、離苦得樂、即身成佛の
念願に精進するに到つた。

法華經は現證を以て一大眞理を顯示したる經である。一代佛教の結論的敘述を眼目
としたもので、華麗なる文辭と、雄大なる戯曲的構想に依つて編成せられ、和漢兩朝
にあつても、誦講の盛大なる此の經の右に出づるものはない、即ち釋尊一代五時の教
說中に於ける最後の八年間たる第五の法華時の大廣說にして如來出世の一大本懷を完
成せられたものである、この經に關する名僧智識の解義註釋は古來その數に乏しくな

い、私の本書を刊行せし所以は、敢てこの經の解義を目的としたものではない、唯だこの經の功力の廣大なるを讃歎し、未だ正信の道に入らずして病難死苦に懊惱せる人々の爲めに、菲才自ら揣らず發信の門を開かんとするものたるに過ぎない、幸にして本書の味讀に依つて人生の歸趨に迷へる人々が速に正信の道に入るの手引となるを得ば、不肖望外の歡びである、豈他意あらんや。

昭和十二年猛夏

菅 勇

しるす

(附記)

本書の刊行に際して伊達清徹師の「松華松毬」に學ぶ所多きを特記し謹みて師に謝意を表す。

妙法の功力 目次

一、迷信邪教を捨てよ……………	一
淫祠邪教の簇生……………	一
迷信から救へ……………	三
二、正しい宗教に就いて……………	九
偉大な自然の力……………	九
理窟をのり越えた體験……………	一四
三、まことの佛教とは……………	二二

皆 歸 妙 法 三
 釋尊の御一代 三
 佛教の起つたのは 二七
 佛教の真隨 二九
 釋尊直傳の佛法 三三
 佛様とは何を指すか 三七

四、法華經の御利益

妙法の由來 四
 諸法實相 四七
 法華經の眼目 五
 御題目の意義 五

五、法華經と現證

現證とは何か 六
 法華經の序品 六
 見寶塔品 七
 現證の二三 八
 布教法としての現證 八

六、日蓮聖人と日扇上人

日蓮聖人の御一代 九
 佛使としての聖人 一〇
 日扇上人の御一代 一七

上人の布教と遷化後の佛立講……………一八

七、現證教としての佛立講……………一三

佛立講の教義……………一三

蓮隆二祖の現證……………一六

謗法罪とは……………一四

信心修業に就て……………一七

八、正しい信仰の仕方と心得……………一四

三大秘法……………一四

御本尊に對する心得……………一六

祈願の心得……………一八

謗法拂ひの仕方……………一五

助行と折伏……………一五

御講と御法門……………一六

御供養に就て……………一六

唱題と導師に對する心得……………一七

九、なぜ病難死苦をのがれるか……………一七

十、即身成佛……………一七

附錄 信行餘錄……………一八

生死の自覺……………一八

天晴地明の運動……………一七

僧形に欺かるるな	一九三
應報の眞理	一九五
愛欲交亂	一九六
われ等の樂園	二〇〇

妙法の功力

菅 勇 著

一、迷信邪教を捨てよ

淫祠邪教の簇生

日本の宗教では何といつても佛教が第一位に置かれて居る、その歴史から見てもその業績から見ても、佛教に匹敵するほどの宗教は他に見當らない、どうして佛教が世の中を風靡するやうになつたかといふことに就ては、そこにいろいろの理由があるであらうが、先づこれを概観すれば、その教へが總ての點に於て徹底的であること、その信仰が自由であり平等であること、その信者の生活上に於て愉快に活動し得ること、いふ三つの點に歸著する、勿論、佛教が日本に始めて渡來してから今

日に到る迄の廣宣流布の爲めには非常な犠牲が拂はれて居るが、而かもその自由平等の思想が極めて穩健であつて信者の行動が誠實に圓滿に保たれて、社會の平和、一家の幸福を招き、惹いては國體の發揚に貢獻する力に満ち／＼て居るからこそ今日のやうに、全國の津々浦々にまで佛敎が廣まつて澤山の信者が出來たのである。處が、日本の文化が進むに従つて、たいの知れない淫祠邪教が次ぎから次ぎに生れて來て、迷信が盛んに行はれる、殊に近頃では智識階級の人々までが、これ等の迷信に捉はれて居るものゝ少くないのはどうした譯であらうか、これは一面から謂へば正信宣布に力めねばならぬ筈の職業宗教家が宗門の興隆とか、衆生の濟度といふことよりも、自分一個の問題、例へば自分の生活とか經濟上の問題にかまけて、その本來の職責であるべき敎義の體得とか、宗旨の宣布といふことを懈つて居るからである、それと同時に、時代に眼覺めないからである、時代の推移に即應すべき自覺、言葉を換へて云へば、現代の大衆が宗教に對して何を求めて居るかといふこ

とを考へないからである、さうして佛敎の職分が單に葬式の引請を營業にするやうになつて、現代人の悩みや苦みを除くべき正しい信仰への敎化、折伏に眠つて居るからである。

迷信から救へ

現代の教育は職業のための教育か、學問のための教育であつて人間を造る、人間の完成といふことが忘れられて居る、そのために相當の教育を受けた、所謂智識階級に屬する人々にして人道を無視し、人間としての軌道を踏み外づして平氣で居るものが多い、化學や物理學や、法律や經濟學等の近代教育は人間に智慧や理窟は與へるが、さてそれ自體は人間の歩むべき道を教へてくれない、そこで現代人は人生の意義に關する信念がない、理窟や智慧は持ち合せて居ても、それを如何に使ふべきかを知らない、即ち理智に富んで信念に缺けて居る。道德や藝術を意識の中に持

ちながら、心の據り所を失つて居る、これが現代人の赤裸々の姿である。

舵なくして大海を航海する船のやうな生活を續けて居る現代人を正信の道に導くことは、嘗にその人々をして正しい人生觀の上に安住せしめ、力強い幸福と感謝の生活に送りこむのみでなく、これを社會的に見ても、國家的に見ても、あらゆる點から見て、今の世の中をして眞に地上の樂園淨土たらしめることになるのである。

それでは正しい信仰即ち正信の道とは如何なることであるか、正しい信仰は正しい宗教を正しい信仰の仕方に依つて信心することである、處が現代の宗教家が眠つてゐる間に、現代の人々は正しい宗教の撰擇を誤つて、間違つた信仰から迷信に陥入り、知らず／＼の間に一身一家を滅ぼし、惹いては世の中に害毒を流すやうなことになる者が非常に多いのは何としたことであらう。

世の中を毒するのみでなく、畏れ多くも我が皇室に對し奉つて不敬の所行があつたといふ理由で取りつぶされた大本教でさへ百萬の信者があつたといふことで

ある、大本教の教義といふものは、開祖と稱する女の無智無學のお筆先なるものであつて、三文の價値もない、狂氣じみた文句の連続であるが、これをまた狂信した智識階級の信者の手に依つて深遠崇高の教義なるかの如く勝手放題に解釋されて狂信者を集めたのである、世の中には人の世の歸趨に迷へる人々が多い、人生の航路に踏み迷つて居る人々が多い、荒唐無稽なお筆先きも非常に有り難い教義のやうに飾り立てられて居ることに迷はされて、忽ちにして百萬の信者が出来たのである、そこに現代人の生活の上に、如何に大きな苦惱や煩悶があつて、何かに縋りたい頼りたい氣持ちに満たされて居ることを窺い知るべきではあるまいか、さうして既に宗教が無爲無力でこれ等の人々を惹き付ける力もなく正信に導くことが出来なかつたことを立證する一つの事實である。

ひとのみち教團も亦無智の教信者に依つて始められてまだ僅に十數年に過ぎないのに數十萬の信者があつた、而かもこの宗教も大本教と同様の理由で取りつぶされ

て了つた。

大本教やひとのみちは淫祠邪教の代表的のものであつた、だがこの二つの邪教の外にまだ、數へされぬほどの淫祠邪教が幅を利かして居るので、これ等の邪教を迷信して居る人々の數は實に數百萬にも上るであらう。さうした人々で充たされて居る現代の世相に對して既成宗團の職業宗教家が殆んど無關心であるのは誠に困つたものだ。

信心の目的は誰れしも御利生を願ひ、幸福になりたい爲めであるが、誤つた信心、邪しきな信仰は唯だその人を不幸にするのみでなく、世道人心を害することになる、そこで先づ自分の信仰が正道であるか、邪道であるかを靜に眞面目に考へて見ねばならぬ、さうしてその信仰が間違つて居ることに氣付いたならば、直にその信仰を捨て、正信の道を求めねばならぬ。

誤つた信仰、即ち邪教の迷信では決して御利益を受けることは出来ない、御利益

を受けられないのみでなく、一身一家を滅ぼして遂には國法を犯すやうな結果に到達することを覺悟せねばならぬ。

邪教淫祠の害毒の恐るべきものであることは政府當局でも之れを認めてどしどし、彈壓を加へて居るが、狂信者の頭では單にこれを法難位に考へて再起三起を考へる、總ての宗教が古來幾多の法難に遭遇しても之れに打ち勝つて勇往邁進して來た事實などに比較して、その宗教がインチキ極まるものといふことに思ひ到らないで、却つて當局の彈壓に敵愾心を持つやうになる、大本教もひとのみちも最初の彈壓では、『法難來れり』など、唱へて居たことを見ても、如何にその迷信が狂的の状態にまで進んで居るかを知るべきである。

殊に淫祠邪教は、その組織が如何にも尤もらしく出來て居るために、人生の行路に踏み迷つてゐる現代人を惹き付ける不思議な力を持つて居る、インチキな宗團はその内容がインチキな程現代人を迷はせるやうに組織されて、如何にも有難い神祕

な御利益のありさうな假面を被つて居る、そのために相當の智識階級の人々がこのインチキに引かゝつて迷信に落ちて行くのである。

斯様な邪教や迷信は斷然排斥せねばならぬのであるが、却々當局の彈壓だけではこれを一掃することが出来ない、例へば大本教やひとのみちは取毀されても、その形を代へ姿を變へたものが次ぎ／＼に現はれる、さうして現代人の弱點を巧妙に捉へて何時の間にかずん／＼伸びて行く、だから、これ等の邪教の簇生を防ぎ止めるには、どうしても既成宗團の人々が自覺奮起せねばならぬ、さうして一面に於ては邪教淫祠の徹底的の排撃に努力し、他面に於ては迷へる人々、惱める人々を正信の道に導き、その迷信から救ひ出すことに銳意せねばならぬ。

二、正しい宗教に就いて

偉大な自然の力

現代の新しい教育を受けた人々に昔風の宗教を語るほどつまらぬことはあるまい、物理化學で固められてゐる現代人の前で、如何はしい祈禱などをしやうものなら、それは嘲笑以外の何物をも得ることは出来ない、狂熱的な信者の姿は誠に苦笑の對象とならずにはあらぬ、これ等の現代人に對して眞實の宗教を語らうとするには、それだけの覺悟、それだけの自覺がなくてはならぬ。

わるい所といふものは非常に目につき易いものである、物の暗黒面はいゝ所よりも大きく見えるのが人生である、角の具合が悪いといつて矯め直さうとして、とうとう一匹の牛を殺して了ふ例へのやうに、わるい所だけを取り除いて、人生に役立

つものだけを利用してゆくといふことは言ひ易くして行ひ難いものであるが、宗教とてもさうである、かび臭い所があつたら、そこだけを斬り捨てたらいゝのである、蟲の喰つたページがあつたらそこだけを斬り取つたらいゝのである、かびや蟲喰ひの所は時代に依つて當然清算さるべき所なのである、人生に今日も役に立つ部分はこれを味つて行かねばならぬ、角の曲りだけを直したらいゝので、牛一頭を殺して了ふ必要はない。

今日、宗教と名乗つてゐるものの中には前にも述べたやうな随分といかもものや、インチキや、どうかと思はれるものが決して尠くはない、死んでからの來世のことばかりを説いて、この現實社會の問題を顧みないやうな養老院的なものもある、あやしげなお水やお札で、萬病を根治するなど、いひふらしてお目出度い善男善女のへそくりを絞るものもある、どこかの山寺に二三日參禪して自分一人で悟つたつもりで野狐禪をふりまはすものもある、あやしげな祈禱や呪文ばかり唱へて、血

と汗の結晶を絞りあげて行く怪行者もある。

兎に角今日宗教を看板にしてそれでその日の生活を營んでゐる連中には随分いかさまものが混在してゐる、私共はこうしたものに対しては、もつと強い憤慨と抗議とを持つて、これ等のものを徹底的に排撃して了ふと同時に、出来るだけ眞實の宗教、正信の道を廣宣流布することに努力せねばならぬ。

處が、現代の人々は宗教のもつ不合理な枯葉や、馬鹿らしく曲りくねつた小枝に氣をくさらして、宗教そのものである一本の木が、人生にとつて、何時の世の中でも花の色や形は違つても、いつも尊い役立ちをしてゐる事を忘れてゐる、蟲喰ひの枯葉があるからと一本の木である宗教を無視することは、人間の生活の基礎を危くするものであることを忘れてゐる。

『宗教は今に人生から消え去るであらう』といふ人がある、素よりいかさまな宗教は文化の進むに従つてその影が消えてゆくであらう、然しまことの宗教は時代と共に

に進んでゆく、さうして世の中の文化が進めば進むほど、人生に於ける尊い存在である、この世の中から病難死苦がなくならぬ限り、眞實の宗教はこれ等のなやみや悲みを除くべき唯一つの偉大な力として存在する、人生そのものは理論や理智で押し通せるものではない、何時かは理論や理智の行きづまりを生ずる時が来るものである、さうしてそのゆきづまりや不安を除くためにはどうしても宗教の力に絶らねばならぬことになる、宗教の力、信仰の力はいつでも批判や分析をのりこえた一つの心境である、この心境に到達した時に、人生の不安や苦惱が除かれる、尤も強い人々とは、尤も強い信仰をもつた人々のことである、宗教的情熱と信仰をもつた人々こそこの地上に樂園浄土を建立することが出来るのである。

私共が人生の實相をみつめる時、誰れが私共の肉體を造り、生命を與へ、智識を與へたかといふことを反省する時、私共は唯だ簡單に神が造つた、佛が造つたと信受することは出来ない、さればとて自分一人の力で、かくあらしめたとも考へられ

ない、それでは誰れが私共を、この社會をかくあらしめたか、それを偶然の力として見逃すことが出来るであらうか。

私は曾て「憍むな人生」と題する小冊子を刊行した、その中に自然の偉大なる法則を説いた、人間の肉體は脂肪、蛋白質、含水炭素、水、鐵、鹽などの成分が組み合せられて造られて居ることは科學的分析で知ることが出来る、けれ共、人間が食物をとつて消化吸収して自分の肉體に同化すると同時に、一方では空氣の中から酸素を呼吸して物質を酸化分解しつゝ、エネルギーを生み出して生活機能を營み、更に内分泌や自律神經系に依つて器管相互の連絡や調製を圖る有様を観察すればする程、その微妙な不思議な力に驚嘆せずには居られない、そこに生命といふ機能が現はれて人間といふものが創造せられるのを知ることが出来るが、さてその生命は何處から來たか、これに就ては昔からいろいろの説が唱へられて居るが、何れの説に依つても自然界の偉大なる無形の力といふものゝ潜在してゐることを認めない譯にはゆ

かない、自然界のあらゆる物質は生物でも無生物でも總てこの自然界の法則に依つて支配されて居る、萬有引力の法則も、物質不滅の法則も、悉くこの自然界の偉大なる力である、この無形の偉大なる力は自然科学が発達すればする程、その存在を確認される、さうしていよいよこの力の神祕にして偉大なることを教へられる、そこに私共が靜に思ひを致すことは私共をして宗教に入らねばならぬ氣持ちを起させる第一歩である、即ちこの偉大なる力こそは宗教に謂ふ所の神であり佛である。

理窟をのり越えた體驗

『宗教に今も昔もありはしない』といふ人がある、若しも宗教的の心持といふものをつきつめて言へば或はさうも言へるであらう、けれども、今の着物も昔の着物も肉體をかくし、寒さを凌ぐといふ意味から言へば同じ物だとも言へるが、然し、今頃銀座の真中を十二重や陣羽織をきては歩けないと同様に、ちがふと言へば天地

の差がある、昔の宗教をそのまゝ今日の私共に無理に信じさせようとするのは無理な註文である。

昔の宗教と言へば、すぐお寺で春秋のお彼岸にかざる地獄極樂の繪を思ひ出す、あの繪を見た時、あんなものは嘘だと思ひながらも、何か恐ろしい氣がしたり、無邪氣な微笑を禁じ得ないことはあるが、さて地下鐵道の走る今日の社會で『地獄』をふりまはして、飛行機の爆音はげしい今日、天國の幸福をといて見たところで、要するに時世後れといふものである、どんなに巧みな言ひまはしでその場を納得させて見たところで、それは現代人にとつて何の價値もないことである、現代の人々はそんなことで信仰に入れるものでない、私共はこの懐かしい地上から敢へなく死んで行くことは悲しくもありさびしくもある、と言つて、天國や極樂のことを考へてこの死線を越へたところに美しい世界を想像しながら、死を美化したり、死を樂しんだりするだけに悠長な氣持にはなれない、私共がさうした無邪氣な氣持になるに

は餘りに現代の科學的智識に妨げられて居る。

然し、目に見、耳に聞くだけの世界で終始するのが人間生活の全體であるならばいかなる時代と雖も宗教の働く餘地はなくなるであらう、處が人間は元來「ちやうど天國極樂の信仰を造り出したやうに鼠が溝の下で死ぬやうに簡單に死にたくはない、地獄や極樂は信ずることは出来ないが、水に浮ぶ泡が消えるやうに、はかなく參つてしまひたくないといふ切實な心持があるものである、と同時に人間の生活には人間の力でどうすることも出来ないやうな場合がちよい／＼現はれる、進歩した科學の力でも何にもならぬやうな場合が幾らも出来る、こうした時の人間の氣持は舵のない船に乗せられて大海に突き放されたやうな、頼りない悩み悲しみに捉はれてそこに何かに縋り着きたい心持に満たされる、私共のこの切實な心持こそが『菩提心』である、この菩提心こそ現代人のいつはりなき要求であり、念願ではあるまいか、その切ない、やるせない願求心、この願求心に應ずるやうな宗教こそが、現

代人の求むる正しい宗教である。

型にはまつたやうな、形式的な、古い偶像は到底私共の心にふれるものがない、私共の今日の日常生活に何のかゝはりのないやうな宗教は私共にとつて全くの風馬牛である、私共は私共の毎日の生活にびつたり當てはまるやうな、私共の願求心を満たしてくれるやうな宗教を選び出すことが最も大切なことである。

他人が何でもないと思つてゐるもの、中から、おどろきと、心のときめきを見出すことが宗教である、考へやうによつては、幾らのねうちもないやうな、人生といふものに、よし身體は死んでも、又やがて死ぬやうなはかないものであらうとも『生れて来てよかつた』といふ、一つの感激を有つことが現代人の持ち得る宗教である、別に繪のやうな美しい天國を頭の中に描かずとも、而かも『ほゝゑみ』を持つて死んで行ける、確信を持つことが現代人の宗教である、私の確信といふのは智識や理解よりはもつと深い一つの體驗自覺である、自分の人生の上に一つのさうし

た自覺體驗を持つことである、何等の疑ひもなく、ひるむ心も、迷ふ氣持もなくなつて、ひたすらに、ひたむきに自分の人間的存在の上に、驚くやうな大きな意味を見出すことが確信である、この確信が宗教的信仰である。

世の中のこと、言ふものは、本當に理窟通りに動いてゐるものではない、近い話
が、ラヂオの天氣豫報がたまに當らぬ、これは中央氣象臺の機械の示す理窟では、
明日の天氣を確實に知る譯には行かぬ證據である、雨が降るといふ豫報をする時に
は、きつと雨雲がその附近に集つて居るに違ひない、ところが急に氣温がかはつた
り、風の工合で雨雲が思ひがけぬ方向に吹き流されたりして豫報が狂つてくるので
あらう、自然現象でさへ、さうであるところを見れば人事世態など、いふものが、「か
うすればきつとあゝなるものだ」と、理法通りにゆくものでないことを考へさせられ
る。

さればとて、私はこの地上に理窟といふものが全然必要がないといふのではない

唯だ學校の教育だけではいけないといふのだ、今日の學校では「二に二を加ふれば
四」になることは教へるが「二に二を加へて五になる」場合や、「二に二をよせて
零になる」場合のあることを教へない、そこで學校を出たばかりの人間は生きた世
間や、人事のこつも、いきさつも分らず、に概念教育の犠牲になつて了つて、少
しの役にも立たぬインテリとなつて了ふ。

お互ひの毎日の生活の指導原理とでもいふべき思想はどこから習ひ覺えたか、學
校は決してたましいひの教育をする處ではない、ついし、たしなみ、根性、品格と
いふもの、本當の教育は家庭から、友人から得て來たものである、生活についての
本當の心の持ち方は確に両親や祖父母から何時となく植え付けられたものである、
學問ばかり、理窟ばかりの人がどうして、この地上の世渡りが正しく出來やう、少
くとも他人と正しく接觸し得るものではない。

その學問を本當の人生體驗、乃ち涙ぐましい人情でこなした世界こそが、私共の

ねらつて居る境地である、文字や學問を、お互の生活體驗といふ胃でこなし、文字や學問の匂ひを消して『腹』を作ることが宗教である、文字や學問の通りには世の中のことは何一つだつて行くものでないといふことを本當に知つた境地が宗教である。

理窟のない世界、理窟をのり越えた世界とはたゞわけもなく涙のこぼれる心地である、何かしら動き出さずには居られぬ、ちつとしてはゐられない行動の世界である、理窟をのり越えた世界にはたゞ、伸々とした、安らかな、朗かな、楽しい行動がある、宗教は理窟をこね廻すことではなくして、その信仰がたゞ自分の生活の上には現はれて來ることである、私共はこうした考へからお互の生活自體に反省して少しでも理窟を乗り越えた生活に入らねばならぬ、そこに正しい宗教の世界がある。

三、まことの佛教とは

皆 歸 妙 法

如何なる宗教が世界の宗教中で一番正しい眞實の宗教であるか、といふことに就ては人各々その見る處を異にするであらうが、私は佛教徒であるが故に佛教こそは最も正しい宗教であると斷言する、今を去ること二千五百年前に印度ヒマラヤ山の南麓に生れられた佛陀世尊の弘め給ふた佛教が世界の王座を占めて居ることは勿論であるが、私共は佛教を信奉することに依つて始めて本當の信仰生活、正しい宗教生活に入り得るものであると確信する。

一口に佛教と言つても、佛教の中にもいろ／＼の宗旨がある、世尊が弘法せられてこのかた、二千五百年の間に佛教の一部分を切り取つて一つの宗旨を始めて、そ

れを佛教の總てとあるやうに説いて居る宗旨が澤山にある、さうして、これ等の宗旨の中には世尊の教へを踏み違へた有害無益の宗旨が少くない、かゝる贗物の佛教が多いことを忘れてはならぬ。そこで私共はまことの佛教を求めねばならぬ、まことの佛教とは何であるか、申す迄もなく法華經を信奉することである、法華經を信奉するといふことは正しい信仰に入るべき唯一無二の大道である、その大道を發見せられたのは日蓮聖人であつて、聖人は信仰の根本たるべき最高の教への何であるかに思ひを致されて、十餘年間研究の結果、妙法蓮華經こそ實に最高最善の法であることに着眼せられ、更に三十年の體驗によつてその事實を證明せられ、

『一天四海皆歸妙法』

と絶叫せられたのである、即ち一切の宗教を統一することが法華經の大眼目であつて、一天四海即ち全世界を皆悉く妙法に歸せしむべしといふ大抱負を遺されたのである。

私はこの諸法中の第一たる妙法を説くに先ちて佛教に對して一通りの説明をする必要がある。

釋尊の御一代

絶代の救世主といふべき釋迦世尊の降誕せられた印度は、世界で最も早く開けた國で、その時代に於ても既に文化が相當に進んで居た、殊に釋尊は印度の幾つもの國の中で最も強大であつた迦毘羅衛城主の淨飯大王の王子として生れ、生後間もなく母君に死別されたけれども、強大國の太子としての大王の覺え、國民の歡喜の裡に、あらゆる榮耀榮華を盡して生長されたのである、而かも生れながらにして天上天下唯我獨尊と絶叫された程に優れた才能の持主であつたばかりでなく、幼にして仁慈、情愛の心深く、舉世敬仰の的となられたのであるが、漸く長ずるに及んで人生に對する懷疑に捉はれ、世の中の無常を感ぜられるやうになつた、さうして病難

死苦に對する懷疑はいよいよ深刻になつて、如何なる享樂も太子の惱みを慰めることが出来なかつた。

太子、十九歳の時、從妹に當らせらるゝ耶輸陀羅姫と結婚された、姫は世にも稀れなる美しいお方で、殊に非常に貞淑のお方であつたので、太子も、慈しみ愛されたことは申す迄もないが、さりとて人生の懷疑を除くべき出家得道の志はいよいよ深く、人の子として、夫としての人間道と、救世の大願との矛盾に逢着して人知れぬ苦惱の日が續いたのである、處が、その中に妃との間に王子がお生れになつてラゴラと名づけられた、太子が今日まで出家を躊躇せられたのは、太子出家の後の迦毘羅衛王國の世嗣が絶ゆるといふことであつたが、ラゴラ王子の降誕に依つて王家の將來は心配がないことになり、年來の希望を達すべき時機が到來したのである、唯だ老いたる父王、貞淑の愛妻、可憐な王子との哀別離苦の情が如何に深かつたかは申す迄もないが、人類一切の苦惱を解決すべき救世の大望の爲めに、遂にこれ等

の絆を断ち切つて、遂に決然として城を脱け出して、救世の首途に立たれたのである。

斯くして出家せられた釋尊は、各地を廻つて、有名な僧侶や、學者を訪ね、その教を受けられたが、何れも御心を満たすに足らず、到底學門の力のみで解脱することとは出来ないことを覺られ、次にはあらゆる難行苦行に依つて自ら悟りを開かうと或は林の中に起臥し、或は各地を放浪して苦行を積まれたが、尙ほ解脱に入ることが出来ず、遂にガヤといふ所の菩提樹の下に靜座斷食して「吾れ道を成さずんば死すともこの地を去らず」と心に誓つて冥想すること四十九日、その早曉、明星の出る時に始めて無上道を悟ることが出来たのである、即ちこの日は十二月八日、御年三十二歳、出家後十二年の歲月が流れて居たのである、實に十二年間の辛苦艱難は遂に釋尊をして佛教の源を開かしたものである。

かうして宇宙の眞理、人生の大道を體得せられた釋尊は、今まで師として學んだ

學者達を始め、王族も武士も百姓も商人も、その階級の如何を問はず、法を説き教を弘めその故郷なる迦毘羅衛城にも歸られて、父大王にも法を説いて佛教に歸依せしめ、その教は殆んど全國に弘通した、中には釋迦の勢力のあるのを嫉んで迫害する者もあり、妨害する者もあつたが、結局は佛教に歸依し、彼の恐るべき夜叉、指鬘などの兇賊でさへその教に依つて成佛したのである。

かくして釋尊は全國を教化すること五十年、八十歳の二月十五日、拘尸城の西北にある林の中、沙羅隻樹の間に床を設け、弟子達や、多くの信者に護られて靜にその一生を終られたのである、而かも涅槃に入られる最後まで枕頭に侍る弟子達に法を説き教を遺されたのである。

以上は釋尊御一代の概略と佛教の起源に關する概説であるが、茲で考ふべき二三のこと記して見やう。

佛教の起つたのは

佛教の起つたのはどんな時代であつたか。

佛教はどうして起つたか。

佛教はどんな經路に依つたか。

佛教の起つた當時の印度は文化は進んで居たが、その結果として國民の總てが奢侈遊惰に耽り、宗教は腐敗し、道義は衰へ、國民の精神界を指導すべき僧侶は墮落して、人心不安に陥入り、偉大なる救世主の出現を待望されて居たのである、文化が進めば進むほど、いろいろの弊害が生れ、世が亂れ、ば亂れるほど、人心は惡化する、かゝる時代に於ては佛教の如き偉大なる宗教の力に依らねばこれを救ふことは出来ない。

人生は無常であり、人間の世の中は苦と惱みの世界である、さうして人間の享樂

は一場の夢に過ぎない、この苦惱を解決し、この懷疑を除かうといふのが、釋尊發願の原因であり、佛教の起つた所以である、思ふに人の地位とか名譽とか富とかいふものは決して絶對のものではない、眞の幸福といふものはそんな皮相なものでもなく、もつと根本的のものでなくてはならぬ、従つて人間の苦惱といふものも、もつと根本的のものである、この根本的のものを求むることが眞の佛教である、佛教の起源は釋尊がこの問題を解決し救済する爲めに、自らの體驗に依つて發見せられたものである。

佛教の出來上つた經路を考へると、机上の學問や、單なる難行苦行では到庭到達し得ない、もつと根本的のもので、釋尊が自分の體驗によつてお覺りになつた、すべての事實を基礎とした教へであることを知らねばならぬ、要するに人間生活の手段方法としては學問だけでは覺束ない、そこには宇宙人生の眞理を明かにして、人間の根本の苦惱、三毒四惡趣を解決して、眞に永遠の幸福を招來するに足るべき體

驗がなくてはならぬことを痛感する。

以上の三點から考へて見ても、いかに佛教が偉大なる宗教であるかを知るべく、苟くも佛教を信仰する人々は釋尊の開かれた道、説かれた教、定められた法に正しく歸依すべきことを納得させられる。

然るに、その後の永い年代の間に、澤山の僧侶が勝手にいろいろの宗旨を立て、本家本元の釋尊の教を踏み違へて居ることは寔に慨はしいことである。

佛教の眞隨

佛教を信仰するものが釋尊の教を基礎とすべきことはいふ迄もないが、然らば釋尊の教に基づくとは如何なることであるか、一言にしてこれを盡せば、釋尊のお説きになつた經典に依ることである。

その信仰が、果して經典に依つて居るかどうか、といふことは信仰上の一大事で

あつて、若しも經典に依らない宗旨があつたとすれば、それは決して正しい信仰、まことの佛教とは言はれない、そこで私共はその宗旨が如何なる經典に依つて居るかを見極めて置かねばならぬ。

佛教の教典は五十年の長い間に、釋尊がお説きになつた教を弟子等が書き記したもので、その数は實に七千卷の多きに達して居る、然し、この大部の教典を全部讀破しなれば佛教は分らぬかといふに、決してそんなものではない、釋尊も亦、我教を信する者は全部の經典を讀めとは仰せられて居ない、この大部の經典の中には、釋尊の教を代表すべき、最上位の教典がある筈である。

釋尊が法をお説きになる時には、時により相手によつていろ／＼の説き方をなされたので、教典も亦、大乘、小乘、權教、實教、本門、迹門など、その質に依り、説き方に依つて區別されて居る、一般大衆に向つて法を説くには、その人の性格に依り境遇に依り、賢愚に依つて説き方を異にする、即ち人を見て法を説けで、その

結果に於て善導の目的さへ達せらるればよいのである、それで或は方便を用ひ、比喻を使はれたのであつて、經典の内容に依つていろ／＼の區別のあることは當然である。

釋尊が一代五十年の間に、お説きになつた教を一代五時と稱へて、五つの時代に分け、その教の内容と質とを乳の味に喩へて五味といふことが唱へられて居る。

第一は華嚴經が代表する華嚴時であつて、これは菩提樹下で成道された直後の三七日間にお説きになつた教で、これを乳味と言つて居る。

第二は阿含經が代表する阿含時で、第一に次での十二年間にお説きになつた教でこの時代を酪味と言つて居る。

第三、第四の方等時、般若時の三十年間は方等經、般若經の代表する時代で、この時代を生酥味、熟酥味と唱へられて居る。

第五は法華涅槃時で、釋尊が涅槃に入られる迄の最後の八年間で、法華經の代表

する時代であつて、醍醐味と唱へられる。

斯くの如く五つの時代を乳の味に喩へてあるが、醍醐味は物の味の中で最上位に位する味である、即ち佛教の經典七千卷の中で、その一切を代表すべき、最上位に置かるゝものは實に法華經である、法華經こそは佛教の眞髓であることが分るであらう、之れに就て釋尊は、

『已説、今説、當説の中に於て法華經最第一なり』

と明斷せられて、釋尊御一代の説法中に於て法華經が最第一であることを釋尊自ら證明せられたのである、即ち眞の佛教を信仰する者はどうしても法華經に依らねばならぬことが明白である、殊にこの事を力説して我國の一般大衆に教へられたのは日蓮聖人である。

釋尊直傳の佛法

前に述べたやうに佛教にもいろ／＼の宗旨がある、佛教の宗旨は劍道や花道の流儀のやうなものであるが、一つの宗旨を開くには先づ

- 一、如何なる經典に依り、如何なることを教へるか。
- 二、信心の目標たる本尊を推戴すること。
- 三、如何なる方法で修行するか。

といふ三つの要綱を定めねばならぬ、勿論佛教の宗旨であれば、釋尊の教に依らねばならぬ。

然るに佛教には八宗とか十宗とかいつて、いろ／＼の宗旨が分立して居る、どうして斯様に澤山の宗旨があるかと言へば、その宗旨を開いた開祖と稱へらるゝ僧侶が、釋尊の教に通曉することが出来ない爲めに、眞實の佛教たる王教を選び出すことが出来ないで、唯だ自分の是なりと信じた釋尊の教の一部分を勝手に強調して一宗を開いたものである、釋尊の教は唯だ一つのものでなくてはならぬ、釋尊は決し

て幾つもの宗旨に分けてよいとは教へられぬ、その教を護持せずして一宗一派を開いて、間違つた教を弘めることは眞の佛教とは言はれぬ。

例へば眞言宗の本尊は大日如來である、大日如來は架空のもので、その經典も亦架空のものである、かゝる實際に依らぬ、架空のものを要綱として、而かも、祈禱を主とした迷信に近い宗旨が、眞の佛教でないことは勿論、到底現代の人々を教化すべき宗教ではないのである。

淨土宗の阿彌陀如來も亦架空のものであつて、前に述べた方等時に屬する方便教である、さうして此宗旨は未來成佛を本願とする教で、現代の新しい教育を受け人々には容れられない。

禪宗に到つては本尊も無ければ、經典もない、禪宗の寺では般若經などを讀むが教義として依つて居るものではない、元來「直指人心、見性成佛」と言つて佛は自分の心にあると云ひ、「教化別傳、不立文字」と唱へて、悟りは心から心に傳へるも

ので文字に書いた經典などは要らないといふ宗旨であるから、一般大衆の爲めの教化には向かない。

釋尊の一代五時の教の中には大日如來とか、阿彌陀如來のやうな架空の假定に依つて説法された時代もあり、禪宗のやうに悟りは自ら開くものであるともお説きになつて居るのであるから、時に依り、人に依つての方便としての説法としては、必ずしも佛教からかけ離れたものではないが、これ等の宗旨が佛教全體を代表するものと思つたら大間違である、言ふ迄もなく、これ等の宗旨は佛教の一部分であり、枝葉である。

處が、これ等の宗旨を恰かも、佛教の眞髓であるが如く説くから、そこに錯誤が起り、人心を惑はすことになる、殊に今日の時代に於てはかゝる宗旨を以て人を教化し、世を救ふことは思ひも寄らぬことである、所謂「正法千年、像法千年、末法萬年」といつて、正法像法の時代なれば間違つた宗旨でも通用したであらうが、末

法の今日では断じてかゝる間違つた法の存在を許さないのである。

茲に着眼されたのが日蓮聖人である。聖人は夙に、同じ佛教でありながら幾つもの宗旨に分れて居ることに疑義を抱き、長い間苦心研究されて、釋尊自ら證明されて居る法華經に依ることが眞の佛教であることを知り、茲に佛教の眞髓を宗旨として堂々と開宗されたのである、即ち法華經を經典として、佛の「たましい」である「南無妙法蓮華經」の七字のお題目を本尊とされたのが、法華宗であり、日蓮宗である、さうして宗旨そのものから言へば、釋尊即ち佛様が立てられたものであるから「佛立宗とも申すべし」と日蓮聖人自ら言つて居られる。

之れを要するに佛教が日本に傳來した後に於てもいろ／＼の僧侶に依つて何宗だ彼宗だと分れ／＼になつて居た佛教が、日蓮聖人に依つて始めて釋尊直傳の本當の佛法が世に弘められることになつたのである。

法華宗は他の宗旨と違つて佛教中の一分派や枝葉に屬するものではない、二千五

百年前に釋尊の描かれた、廣大無邊なる佛教の眞髓が、二千年後に於て、我日蓮聖人に依つて、日本に芽を生じ、全世界の人類の離苦得樂の爲めに妙法の枝を擴げ、果を結ばんとして居ることを、はつきり認識せねばならぬ。

佛様とは何を指すか

佛様の尊いことは昔から日本人の心に植え付られた通念である、然し、佛様とは果して何を指した言葉であるか、さうしてどうしてそんなに尊いのであるか、といふことは餘り知られて居ない、苟くも佛教を信心する者は、この事に就いてはつきりした心得がなくてはならぬ。

人間には如何なる人にも迷ひがあり、苦みがある、處が、佛様には迷ひもなく、苦惱もなく、悟りがあるから、心に少しの曇りもなく、明鏡のやうな心であるから、宇宙人生一切の事が、はつきりお解りになつて居る。

かやうに悟りを開かれたのは、よく行を積まれたからで、その爲めに、三毒四惡趣といふやうな禍の因を解決して、自分自身のことは申す迄もなく、一切のことがお解りになるだけの力をお持ちになつて、この力を以て佛法といふ廣大無邊の教を完成され、之に依つて一切衆生を救ふべき道をお開きになつたのである、人間同志の間でも、自分の思案に餘つたことを解決してくれるとか、自分を善導してくれる者は、力の優れた人、人格の高い人として尊敬される、と同様に、佛様は私共人間の病難死苦を解決して、眞の幸福を與へられる、無明を取去つて覺りの生活には入れるやうに完全無缺の教を與へられる、さうしてその教は佛の持ち給ふ神通力に依つて、過去、現在、未來までに亘つて居る、斯様に考へて見ると、佛の慈悲が如何に深遠であるか、如何に佛様が尊いかといふことが明白になるであらう。

それでは佛とは何を指すのであるか、普通言ふ所の佛様は、釋迦世尊のことであるが、佛様は釋尊だけであらうか、死んだ人のことを佛といふ成佛といふ言葉もあるが、

る、或は三世の諸佛などもいひ、佛とは果して何を指すのであるか。

佛説に現はれた佛には、教理によるものと、國土を異にするものとの二種の佛がある、釋尊が法をお説きになるには、いろ／＼の譬喩や、方便をお用ゐになつたことは前に述べた通りである、悟りを開いた境地、眞理に一致する心境、それを佛といふのであつて、その境地に人を導くことが、釋尊弘法の目的であつたが、人智未開の時代に於ては、斯様な説法では普通人には解らない、そこでいろ／＼喩や方便で、その境地を説明されたのである、

教理によるといふのは、例へば大日如來のやうな、有名無實の架空のものであるが、金剛界、臺藏界などの教をお説きになるには、この大日如來を、佛の本體として説かれたのである。

國土を異するものといふのは、阿彌陀如來の如く、この世界の西方に安養世界といふ所があつて、そこに阿彌陀如來が居られて、人々を化導して居られる、この世

の人々が死ぬと西方の國へ行つて、佛の弟子となり、極樂淨土に住むことが出来る、それにはこの世で悪事を働いてはならぬ、悪いことをすれば極樂淨土に行かれぬのみでなく、地獄界に墮ちて、浮ばれないといふやうに教へられた、この阿彌陀如來も亦架空のものである。

釋尊はかゝる方便に依つて、だん／＼弟子達を教化せられ、その晩年に於て法華經をお説きになる時に、始めて本佛は唯一つであるといふことを明示された、さうして大日如來とか、阿彌陀如來とか、申されたのは、釋尊御自身の心の影を假りにさういふものゝ形に現はして教を説かれたに過ぎないことを明確にされたのである。

人が死んで佛になるといふのは、死に依つて肉が滅びるから、今までの苦惱の囚である三毒四惡趣といふものが、その表面から消え失せて、恰かも悟りを開いた佛の境地に似て居る處から、佛になるといふのであるが、死ねばとて直に佛になれる

ものではない、生きて居る中に成佛してゐた者でなくては、後に生き残つた者が追善供養をしてやつて、始めて佛になれるのである。

釋尊も亦、やはり人間としてこの世に生れられたのであるが、體驗に依つて人生の大真理を究められ、自ら覺を開いて佛の境地に達せられた、即ち始成正覺の佛この世で始めて正しい悟りを完成した佛になられたのである、ところがその晩年法華經をお説きになる時、さらに廣大なる意味をお示しになつた、即ち

「自分がこの世に生れ出て、覺を開き、法を説き、衆生を濟度して來たことは、自分が人として生れて來たこの一代だけのものではない、實に「久遠實成の佛」といつて、この宇宙には何億萬年とも圖り知られぬ始めから、法もあり、佛もあつたのである、その久遠の佛が、自分の姿となつて、この世に出現したのであつて、人間としての姿は消えるとも、佛としては未來永劫に亘つて存在して居る」といふ意味のことを仰せられた、即ち始成の佛は人としての釋尊を指すのである

が、久遠實成の佛は宇宙の眞理であるとも考へられる、換言すれば、佛といふものは、この宇宙を支配するところの、無形の偉大なる力であつて、この力が假りに人間として、この世の中に現はれたのが釋尊であるとも言ひ得る、惟ふに久遠の佛こそ、唯一つの本佛であつて、釋尊こそは實にその本佛である。

人間が佛になるといふことは、結局、佛敎を信心して、眞理を體得することである、成佛といふことは死んでからでなく、生きて居る間に佛に成ることである、この成佛の方法を説き明されたのが佛敎で、その敎を信じ、その法を修行して行けば、佛様と同じ道を行くのであるから必ず佛に成れるのである。

これを要するに佛とは覺を開いた者、眞理を體得した者といふことであつて、その尊さが身について、最高最善の人格の光を放つといふことであつて、信心の目的は實に成佛を願ふことであると言はねばならぬ。

尙ほ茲に一言述べて置きたいのは佛といふ名稱は何から出たかといふことであ

る、これは佛陀といふ梵語の略名で、陀の字を除いて佛と稱へるのである。

この佛といふ文字の意義は、悟を開いた者、よく眞理を知つてゐる者、といふ意味である、この意味から佛の十號といつて同じ佛のことをいろ／＼の言葉で現はしてある、即ち

如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、調御丈夫、天人師、佛、世尊。

であるが、何れも悟を開いた者、眞理に通達した者といふ意味が含まれて居る、この中でも一般に用ゐられて居るのは如來、佛、世尊の三つである。

如來は眞理を招來するといふ意味がある。

佛も亦迹迦牟尼佛など、云ひ、牟尼は聖人といふ意味が含まれて居る。

世尊は釋尊の代名詞であつて世界で最も尊い方といふ意味である。

尙ほ三世の諸佛といふことは、過去現在未來の三世に亘つて成佛したものを總稱していふ處の言葉であることを附記して置く。

四、法華經の御利益

妙法の由來

妙法蓮華經は梵名を薩達摩芬陀利迦修多羅といひ、漢文には正法華經、妙法華經と譯し、これをまた略して法華經といふて居る、法華經は一部二十八品から成り立つて居る。經典で、序品を以て始まり第二十八普賢菩薩勸發品を以て終つて居る、その説相は平易で、文中には譬喩があり、因縁談があつて、誰れでも一讀して一應の領解を得ることが出来るが、若し一步進んで、之を深く研究すれば、哲學的にも、宗教的にも、はたまた道德的にも、汲んでもく猶ほ盡し難いほど深遠な内容が含まれて居る。

法華經は前にも述べたやうに、釋尊がその晩年にお説きになつた佛教の眞髓であ

り、法の極致である、これを他の七千卷の經典に比ぶれば、恰かも太陽の如く、一切の王座を占めて居るといふので、又これを王經とも稱へて居る、釋尊が法華經をお説き始めになつたのと同じ時に無量壽經といふ經典をお説きになつて、その中に法華經の由來に就て説明してある、その説に依ると、元來人の性行といふものは十人十色、萬人萬様である、それ等の人々にただ一つの教を當てはめやうとしても困難である、所謂人を見て法を説けて、赤には赤、黒には黒と、衆生の心に應じて教を説かれたので、澤山の教義を生ずるやうになつた、然し佛様の本當の御意志は、多くの人たちの氣持に合せて教を説くことは本意ではないが、最上最善の教をいさなり説いても區々の衆生には解らない、そこで、衆生を導く方便として、先づ衆生の心に應じて方便の教を説き、下拵へをして置かれるために、無量の教義が生れたのである、即ち、方便の教は他の意志に隨つてお説きになつたのだから、これを隨他意説と唱へ、その教は佛様の本當の御意志でなく、假の教であるから權教と稱し、

權は「假り」のといふ意味である。

斯くして佛様は四十餘年の長い間を權教に依つて説法せられ、下拵へが十分出來上つたので、もう本當の教を説いてもよからうといふので、自分自身の奉じて居られる法の極致、教の眞髓をお説きになつたのが、この妙法蓮華經である、法華經は釋尊御自身の御意志に隨はれたので、隨自意説と申すのである。

釋尊が今こそ眞實の法を明かにすべき時であるとして、多くの弟子を集めて堂々と宣言されたので、弟子達は非常の期待を以て耳を傾けた、處が、それ迄の四十餘年間に説かれた教は、すべて假の教であるから、正直に捨て、了はねばならぬ、と言はれたので、今まで金科玉條として信奉して居た教を、捨てよと言はれた釋尊の教を信ずることが出來ず、席を立つて退出した者が五千人もあつたといふことである。

權教を眞の教、眞の佛敎と心得て居た者にとつては寢耳に水の感があつたのも無理からぬことであるが、それだけ、法華經が如何に深遠な教であるかを知るべきである。

法華經は眞實經であり、他の經典は權教即ち方便教である、然し法華經の中にも本門と迹門の區別がある、この事に就ては項を新にして説明するが、法華經に進んでも迹門の裡はカゲでありアトである、本體即ち眞實に導く順序として示されたものである。

釋尊は斯く明瞭に指示されて居るに係らず、徒らに水に映つた月を見て、月の本體だと信じ、眞の月は天上にあることを知らない者の愚や笑ふべく、憐れむべきである。

諸法實相

法華經の根本とも中心ともなつて居る思想は、諸法實相の四文字に盡きて居る、

これを又色心實相とも、萬法一如とも、色香中道即事而真ともいふてゐるが、これ等の名目は同一の思想を言ひ現はさうとしたものであつて、これをつゞめて言へば、現象即實在（實相）といふことになる、即ち整然として存する天地の法則その儘が宇宙實在のすがたと見るのである。

それでは宇宙の實在とは何であるか、實在とは空、假、中の三諦（諦は眞實といふ意味）の圓融無礙の相である、宇宙の森羅萬象はその總てが因縁に依つて生れたものである、既に因縁に依つて生れたものであるとすれば、これは現に存在して居るものでなく、物それ自身は空なものである、また因縁所在であるから假りに存在してゐるのでこれを假とも言ひ得る、即ち有であると共に空である、だからそれ自体を言へば、有でもなく空でもない、又有であつて空である、さうしてその中道が諸法の實相である、この空、假、中の三つのは三つ別々のものとして見るべきではなく、互にそれ／＼相即して居る、即ち空と假と、假と中と、中と空といふや

うに融け合つて居るものである、この融け合つたすがたを三諦圓融といふのである、さうして色心の萬法は一としてこれを具せざるものなく、天地に充滿し、萬象に偏在するこの諸法の實相は、幽玄深遠にしてこれを形容すべき適當の言葉がない、そこでこれを妙と名づけたのである。

即ち妙法とはこの經で示された法に名づけ、蓮華とはその妙法を譬へたものである、恰かも蓮華が泥の中にあつながら、泥に染まず、無垢清淨の姿を現はすやうに、煩惱の泥中であつて菩提の花を開く煩惱即菩提の妙理はやがてこれ諸法實相、泥中の蓮が枝もなく蔓もない一本の莖から美しい花を開くは、この經が唯一乗法のみで、二乗もなく、三乗もないのに比ぶべく、殊に花開くと同時に實を結ぶあたりが、花實同時、因果一體の妙理を示すのにこの上もない例證である。

三諦圓融の教理と共に互に表となり裏となつて諸法實相の理を明にするものは一念三千の思想である。一念とは介爾の一念といつて私共刹那／＼の心をいふので

あつて、三千とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十界（これは得道成佛する段階である）に各々十界を具へて百界となり、百界の一つ一つに性、相、體、作、因、緣、果、報、本末究竟の十如を有して千如となり、この千如は衆生、國土、五陰の三世間の別があるので三千世間となることを言つたものである、かくして一切の法を具盡せざるものはないことになる、一念三千とは一念中に三千の法界を具し、三千の森羅萬象はまたこの一念中から生れるといふのである、即ちこの思想は更に進んで現實の宇宙や、人生を收めて、盡く之を人間の心の中にありとして、一切の萬有を當體一念の内容から表現したことを顯はしたものである。

斯様に説いて來ると非常に難かしいやうに思はれるが、これを一言にして平易に説けば、人間社會のことは勿論、娑婆世界一切のことは、一つも洩れなく佛法の中に總括されてゐるといふ眞理の極致を示されたものである。

さうして眞理といふものは唯一つに歸すべきもので、二つも三つもあるものではない、根本の根本、元の元であるところの眞理は唯だ一つであつて、従つてそれは一切衆生に當てはまるべきものである、即ちそれが法華經である、法華經に依つて一切の宗教を統一すべきものである、壽景品の中に

『一大佛教及び、一切の宗教を統一す』

といふ意味の言葉がある、教は思想の根元であるから、一切の宗教を統一するといふ事は思想を統一するといふことになる。

功德品の中にこの法華經を信ずる者、法華經を弘める者の功德に就て現はされてある、即ちこの經を弘める者、法華經を行じ持つ者の功德が如何に大きなものである、永遠に盡きぬものであるかといふ事を明言してある、また法華經に依つて救はれた人々の立證をしてある、日蓮聖人龍の口の御難に際して、鎌倉八幡宮の社前に

「如何に八幡大菩薩、誠の神に在はすか、在はさぬか、又呪はんや教主釋尊の法華經を説き給ひし時、無量の諸天神に三國の善神、皆淨く法華經の行者を守護せんと誓ひ給へるや、日蓮今夜首を刎ねられ候はんか、靈山淨土へ來りて其背誓違約を教主へ訴へ候はんぞ、神明若し法華經の行者を守護するの御心あらば、疾く現證の奇特を顯はし給へ、如何にや、如何に」と大音聲に叫ばれたのも、この經典の中に明かに示されて居ることに依られたのである。

法華經の弘布に就ては時と所と人とを豫言されてある、佛様は御自身の入滅後の變遷について五箇の五百歳として、

- 第一の五百年 解脱堅固の時代
 - 第二の五百年 禪定堅固の時代
- └── 正法千年

- 第三の五百年 讀誦多聞の時代
 - 第四の五百年 多造塔寺堅固の時代
 - 第五の五百年 鬪争堅固の時代
- └── 像法千年

(末法萬年と稱へ末法時代は永久に續くといはれてゐる)

と豫言して居られる、さうして法華經は第五の五百年、末法の初めに於て世に現はれ永久に續くところの教であると申されてある、法華經の藥王品の中に、我が滅度の後、後の五百年の中に閻浮提(世界)に廣宣流布して斷絶せしむることなし。

と申され、勸發品の中には後の五百歳濁惡世の中に於て、それは經を受持することあらば、我當に守護して其衰患を除き安穩なることを得せしめん。とも申されてある、即ち法華經は末法時代の衆生を救ふ爲め言葉を換へて云へば

丁度現代の私共衆生の爲めに説き遺された教である。

次にこの末法應時の大法は何人に依つて弘められるかといふことである、釋尊がこの法を説き給ふた時には普賢、文殊、彌勒などいふ優れた菩薩達が多勢居られて、我こそ妙法の弘布に當らんと志したのであるが、釋尊は

「お前方ではその任でない、自分が世に出る前に化導した諸菩薩の中に上行菩薩がある。この者こそ末法の世に再現してこの大法を弘める大役を果すであらう」と豫言されたのである、即ちこの上行菩薩の化身として出現されたのが日蓮聖人である。

法華經は實に釋尊一代の説法の結晶であつて、その樂王品の一節には

「此經は則ち閻浮提の人の病の良藥なり、若し人病有らんに、此經を聞くことを得ば、病即ち消滅して不老不死ならん」

と説かれてあるやうに、七難即滅、七福即生、必ずしも肉體の病ばかりでなく、

限りなき幸福を授かり、老若、善惡の區別なく、何人と雖も信じられるところに妙法の偉大さがあり、妙法の功德の宏大無邊なる所以がある。

法華經の眼目

法華經が如何に尊い經文であるかは以上の説明に依つてその大要を説いた、即ち法華經を行ずれば眞理を覺り、正しい信念が出来る、さうして立派な人間となつて衆人を教化し、善導することが出来る、昔はこの經文を書き寫すことだけで善根が積めるといはれた、また讀誦といつて讀み方を知つてゐる者は、それを弟子に教へる、弟子は又次の弟子に教へるといふやうに、順次に今日に傳はつて來た、處が今の時代はもう經文を讀誦する時代ではない、寫經の時代でもない。

然らば現代に於てはどうすればよいか、この方法を明示されたのが日蓮聖人である、即ち本尊としてまつられた『南無妙法蓮華經』の御題目を唱へることが眞に法

華經を行ずる唯一の方法であると示されたのである。

之れに就て日蓮聖人は、

「釋尊の因行果の二法は妙法五字に具足す」

と申され、又

「八萬法藏の廣きも、一部八卷の多きも、たゞ南無妙法蓮華經の五字七字を説か
んが爲めなり」

「法華經の全部は廣なり、一部は略なり、妙法蓮華經の六字は要中の要なり、日
蓮は廣略をとらずして要を好む」

とも申されて居る、佛様がお説きになつた一切の教はこれを煎じつめてみれば結
局南無妙法蓮華經といふ御題目に盡きるのであつて、これが要中の要であると申さ
れたのである。

されば、お題目を一度唱へることは法華經一部八卷を如實に讀み奉ると同一であ

る、とも仰せられて居るやうに、一遍唱へれば一遍、十度唱へれば十度法華經全部
を讀誦したのと同様の功德があるのである。

これを要するに法華經の教理がどうの、經文の解釋がどうの、といふ事は、まる
で知らなくとも、御唱題を熱心にやりさへすれば、その廣大の功德を授けて頂くこ
とが出来るのである、「解ありとも信なければ不可、解なくとも信あれば可なり」と
も申されてあるやうに、教理や解釋などに心を用ゐることは却て信に入るの妨げと
なつて宜しくない、信といふことが一番大事なことであることを充分辨へねばなら
ぬ。

釋尊の弟子に周利般特といふ人があつた、この人は性質極めて愚鈍で何を教へら
れてもすぐに忘れて了ふ、佛様からお經の一篇を教へられたが三ヶ月もかゝつて覺
えない、その經を讀む聲を窓外で聞いて居た牧夫の方が却つて先きに覺えて了つた
ので牧夫から學んだといふ程の人であつたが、釋尊の教を素直に聞いて少しも疑は

ぬほど信が深かつたために、釋尊のお弟子中で智惠第一と言はれた文珠とか普賢とかいふ菩薩方より却つて先きに成佛することが出来たといふ話がある。これは現代に於ても亦信念上の鐵則である、とかく智識の優れた人は理論に走り易く、信心の本旨に達することが遅れる、學究的なことゝ信心の本旨とは全然違つて居る、この點を考へて唯だ一心に信行すべきである。それには日蓮聖人のお言葉通りに、たゞ一途に御唱題を勤めることが唯一無二の修行の方法であり、法華經の眼目である。

御題目の意義

南無妙法蓮華經の七字は信心の目標としての御本尊でもあり、又廣く世に示す處の旗印でもあり、さうして之れを唱へることに依つて、有難い、廣大な功德も得られるといふのであるが、この御題目の意義を一通り知つて置くことも肝要である。

御題目の意義を或は文字そのものから解釋する人もあれば、或は佛教の教理を現はしたものであると説明する者もある。然し、これは單に文字の上の意義でもなく、教理ばかりでもない、即ち御題目そのものが眞に佛の精神であり、佛である。

南無妙法蓮華經の中の妙法蓮華經は佛様の説かれた教典の題名である、さうして「南無」といふことは「敬ひ順ふ」の意味で、佛教の言葉では「歸依する」といふことである、だから妙法蓮華經に歸依するといふことで、自分を無にして佛の御徳を受入れるといふ心である。

元來佛様の功德はいふ迄もなく佛様の教から生ずるもので、その教の有難いことは、その教を説かれた精神が尊いのである、その不思議な神通力が有り難いのである、さればこそ、妙法蓮華經の中には佛様の精神が宿つて居る、妙法といふ神通力がある、それ故に妙法蓮華經に歸依するといふ事は、直に佛様の精神に觸れ、その偉大な無形の御力を頂くといふことになるのである。

法華經の壽量品の中に

「今是の良藥を留めて茲に置く」

と仰せられ、また

「法華の名號を受持する者は福ひ量るべからず」

とも仰せられて、御題目が末法の衆生の爲めに世界第一の良藥であり、これを受持する者は限りなき幸福が得られるぞと、佛様が保證して居られるので、その功德の如何に尊いかを知るべきである、殊に法華經は死んでからの御利生だけでなしに、現實に、今の世で、直に御利生を得られる現證經である、現證を以て一大眞理を顯したお經である。

法華經に含まれてゐる絶大の力、不滅の眞理に就ては前に幾度も繰り返して述べてゐるが、尙ほ法華經の絶大なる力は

如來一切所有法、如來一切自在神力

如來一切秘要藏、如來一切甚深之事

の言葉で現はしてある、即ち佛様の持つて居られる一切の法、換言すれば眞理、この眞理を自在に働かす偉大なる力、それに佛様のお證しになつた教、量り知られぬ功德、これが皆この法華經の中に含まれて居る。

御題目の五字七字はそれが直に佛様の精神であり、その意味は甚深、その功德は無量である、私共は斯かる尊い御題目を唱へつゝ益々正しい信心に精進せねばならぬ、そこには地上の樂園淨土が私共に無限の幸福を授けるために俟つて居るのである。

五、法華經と現證

現證とは何か

法華經は現證經である、現證を以て一大眞理を顯はしたお經である、このお經が如何に隨喜渴仰すべき幽玄微妙の教義で満たされて居るかは前に説いた處でその大略を述べた、然るに法華經以外のお經には大の字を冠らせたものは多いが、妙の字を冠らせたお經はない、何故にこのお經だけに妙の字を用ゐてあるか、惟ふに一代五時の最後の時に於て、如來五十年の説教をうつて一丸として、如來出世の一大本懷を完成せられたのが、この法華經であるから、はつきりこれを區別する爲めに妙の字を附せられたのである、それ迄の經文は大藏圓滿ではあるが、まだ完成されて居ない、完成されて居ないから純一無雜ではない、處が法華經は總ての點に於て統

一完成されて居る。

法華經は左の二十八品から成り立つて居る、
即ち

- 序品 第一
- 方便品 第二
- 譬喻品 第三
- 信解品 第四
- 藥草論品 第五
- 授記品 第六
- 化城諭品 第七
- 五百弟子授記品 第八
- 授學無學人記品 第九

- 法師品 第十
- 見寶塔品 第十一
- 提婆達多品 第十二
- 勸持品 第十三
- 安樂行品 第十四
- 從地涌出品 第十五
- 如來壽量品 第十六
- 分別功德品 第十七
- 隨喜功德品 第十八
- 法師功德品 第十九
- 常不輕菩薩品 第二十
- 如來神力品 第二十一

- 囑累品 第二十二
 - 藥王菩薩本事品 第二十三
 - 妙音菩薩品 第二十四
 - 觀世音菩薩普門品 第二十五
 - 陀羅尼品 第二十六
 - 妙莊嚴王本事品 第二十七
 - 普賢菩薩勸發品 第二十八
- 以上の中、序品から第十四品までは迹門であつて、後の第十五から第二十八品までの十四品がこの經の妙義を光り輝くやうにされた本門である、さうしてその中でも壽量品は實に久遠實成の法門である、この最後の妙理である本門久遠實成といふことが法華經の生命である、これが所謂現證である。
- 然らば、現證とはどういふことであるか、こゝに現證の意義に就て簡単に述べて

置くことも必要であらう。

日蓮聖人の御遺文に

『されば末法惡世には宗論問答何の詮かあらん、現證利益こそ御弘通の道也』

と仰せられた、即ち末法の世の中では、未來成佛、寂光淨土の教へだけでは凡夫發信の力が足りない、そこで眼のあたり御利益のあらはるゝを眼に見せ、耳に聞かせて、教化弘通すべきであると仰せられた、されば現證とは佛の有し給ふ不思議自在の神通力が示す所の偉大なる事實である、現證の字義には左の四つの意味がある。

- 一、目前に現はるゝ利生
- 二、顯現した生身の佛體
- 三、妙法經力の記録
- 四、成佛の記録、過去の佛

之れを要するに、法華經の眞理、その尊い功力を現實の上に證據立てることを意味するもので、日蓮聖人の

『近き現證を引きさて遠き信を取るべし』

との御教も、亦

『されば過去未來を知らざらん凡夫は此經は信じ難し、又修業をしても何の詮かあるべき、是れを以て思ふに現在に證據あらんずる人、此の經を説かん時は信ずる人もありやせん』

との御教も發信の門を開くべき手段は現證の上に立つた布教でなくてはならぬことを強調せられたもので、法華經の現證經たる所以も亦知るべきであらう。

法華經中の現證はこれを一言にして盡せば『妙』である、この妙不可思議といふ言葉は讚歎の言葉である、ほむる言葉である、宗祖大師の『ほむる言葉を多く候』である、以下この經文の中に擧げられた現證が如何に大切なことであるかを説いて

見やう。

法華經の序品

序はいとぐちである、釋尊出世の一大事である法華經を説かんとするいとぐちであるから、それ迄に説かれた經文の序品とは大に異なる所がなくはならぬ、即ちこの序品を説かれる時に六つの不思議な事があつた、これを六瑞といふのである、六瑞とは 一、説法瑞 二、入定瑞 三、雨華瑞 四、地動瑞 五、心喜瑞 六、放光瑞であつて、最後の放光瑞から生れ来る萬八千の世界に於て又六通りの瑞が見えた、即ち 一、見六趣瑞 二、見諸佛瑞 三、開佛説法瑞 四、四衆得道瑞 五、見菩薩所行瑞 六、見佛涅槃瑞の六瑞である、この彼の土の六瑞は巧妙な活動寫眞を見るやうに現はれたのである、斯様な彼我の六瑞相は嘗て四十餘年の間に無かつたことである、これ程の大瑞は現はれなかつたのである、これに就て日蓮聖人は

『妙樂曰く何れの大乗經にか集衆、放光、雨華、動地あらざらん、但し大疑を生ずることなし等云々、此の釋の心はいかなる經々にも序は候へども、此れほど大なるはなしとなり』

と仰せられ、法華經序品の六瑞は一代超過の大瑞なりとも讚歎されたのである。これに就て彌勒菩薩が衆に代りて文殊菩薩に尋ねられた時、文殊菩薩の答へられた中に

『諸の善男子、我れ過去の諸佛に於て曾て此瑞を見たてまつりしに、斯の光を放ち已はりて即ち大法を説き給ひき、是の故に當に知るべし、今の佛の光りを現じ給ふも亦復是の如く衆生をして咸く一切世間難信の法を聞知することを得せしめんと欲するが故に斯の瑞を現じ給ふならん』

と仰せられた、一切世間の人々がとても信じ難い實相究竟の妙理を助發し説示せんとするが故に、一切衆生に大信力を起さしめんとしてかゝる一代超過の大奇瑞を

現はされたのである、現證とは發信の門である、信仰のいとぐちを開くのが現證の利益である、若し現證を樂んで、これ以外に出ることを知らず、一生茲に停滯して居たならば、遂に肝心の法華經を聽聞することは出来なかつた、現證は入信の架であることを忘れてはならぬ。

見 寶 塔 品

迹門の法門、十如實相、二乘成佛の序分としては六瑞の先證があつてその眞實を證據立てられたが、本門の法門、久遠實成、釋尊出現の序幕としてこれを證據立てんとするものは見寶塔品の所説、多寶塔の涌現である、日蓮聖人は

『今、この御本尊は教主釋尊五百塵點劫より心中にをさめさせ給ひて世に出現せさせ給ひて四十餘年、其後又法華經の中にも、迹門はせすぎた寶塔品より事起り、壽量品に説き顯はし、神力品囑累品に事極りて候云々』

と仰せられ、壽量品の法門の事の起りは寶塔品であるといふのは、即ち寶塔品が本門の序分であるといふことである、然るにこの品は迹門の第十一品であるので、明かに本門と申す譯には行かないが、密序といふのである、又本門の序分である涌出品と對稱して涌出品を近序といひ、寶塔品を遠序ともいふのである。

さて、遠序である寶塔品は何事を密表するか、これには二つの意義がある、一は證前、二は起後である、阿佛房御書に

『御文に云く、多寶如來涌現の寶塔何事を表し給ふと云々、此法門由々しき大事なり、寶塔をことほるに天台大師文句の八に釋し給ひし時、證前、起後の二重の寶塔あり、證前は迹門、起後は本門なり』

とありて證前、起後を説明してある、そこで迹門八品の間に二乘成佛の劫、國、名號の授記が行はれ、正宗分が終りを告げて法師品の流通分が起つた、その時佛前の大地震裂して地中から大七寶莊嚴の妙なる塔が出現して、さうして、その中から

「善哉、善哉、釋迦牟尼世尊の説の如きは皆是眞實なり」

靈山一會の大衆は皆一齊に驚きの眼を以て此奇怪にして立派な寶塔を見上げた、高さ五百由旬、縦横二百五十由旬の、而かも金、銀、瑠璃等の七寶を以て飾られてある、この時、大樂説菩薩は衆疑を代表して、「此の寶塔は何の因縁を以て出現されたのでありますか」とお尋ねすると、佛は「此の塔は東方の寶淨世界の教主多寶如來の安座ましますものである、此の佛は其菩薩道を行ずる時の別願に、如何なる所にもあれ、法華經を説く所あらば、其處に出現して法華經の眞實なることを證據立たいと誓はれた、それで今こゝに來りて、我が所説の二乗成佛の大義を證せられたのである」とお説きになつた。

二乗成佛といふことは、佛一代の眼目ともいふべき大事な法門である、これを永らくの間（四十餘年）秘め置かれて、二乗は永く佛に成る可らずと禁められてあつた、それを法華經に來りて掌を返すやうに、二乗皆成佛すべしと御許しになつた

のであるから、一切の聽衆皆前後の相違に驚きの心を生じて、たやすく信ぜなかつたのである、日蓮聖人はこの時の光景を叙して

「十方無邊の世界の一切衆生一人も無く、迦葉舍利佛等は永不成佛の者、供養しては悪しかりぬべしと知りぬ、而るに後八年の法華經に忽ち悔ひかへして二乗作佛すべしと、佛陀とかせ給はんに入天大會信仰をなすべしや、用ゆべからざる上、先後の經々に疑網をなし、五十餘年の説教皆虛妄の説となりなん、乃至教主釋尊の御語すでに二言になりぬ、自語相意と申すはこれなり、外道が佛陀は大妄語の者と笑ひしことこれなり、入天大會興さめてありし程に、その時に東方寶淨界の多寶如來、高さ五百由旬、廣さ二百五十由旬の大七寶塔に乗じて、教主釋尊の人天大會に自語相違をせめられて、とのべ、かう述べ、さま／＼に宣へさせ給ひしかども、不審猶晴るべしとも見えす、もてあつかひて御座せし時、佛前に大地より涌現して虚空に昇り給ふ、例へば闇夜に満月の東山より出るが如し、七寶の塔

大虚にかゝらせ給ひて大地にも付かせ給はず、天中に懸つて寶塔の中より梵音聲を出して證明して云く、云々』

以上は所謂證前である、即ち多寶塔が證言を出して靈山の暗雲を一掃した、この證言は寶塔湧現以前の分であるから、これを證前といふのである。

處が多寶如來の證明で一段落付いたやうだが、まだ決して疑ひの雲はすつかり拭はれて居ない、そこで釋尊は證明を徹底させる爲めに更に三變土田といふことを現ぜられた。三變土田とは三たび土田變ずるといふことで、土田は娑婆世界を指すので弊惡の地を意味する、即ち菩薩達が多寶塔を開いて、如來の尊形に接せんと請はれた、釋尊はこの請願に依つて寶塔を開かんとする時、先づ十方分身の佛を集めねばならぬ、その爲めには穢れた娑婆世界の山河の凸凹及び地獄、餓鬼、畜生、修羅等の四惡趣があつては不都合故、これと平坦にし、清淨にして一佛國土とする爲に大神通力を現はされ、三たび清淨ならしめて通じて一佛國土とし、その清淨の地へ

十方分身の諸佛を集めて多寶塔を開かれた、多寶如來は塔の中から釋尊を請待し、半座を分つて二佛ならび坐されたのである、さうして釋尊は大音聲を以て

「誰か能く娑婆世界に於て妙法華經を説かん、今正しく是れ時なり、如來久しからずして當に涅槃に入るべし、佛此の妙法華經を以て付屬して在ること有らしめん」と欲す」

と宣ら給ふたのである、この聲に應じて澤山の迹化他方來の菩薩が起立合掌して誓言せられたのを、釋尊は

「止みね善男子、汝等が此經を護持せんことを須ひじ、所以者何、我が娑婆世界に自ら八萬恒河沙等の菩薩摩訶薩あり、此の諸人等能く我が滅後に於て、護持し讀誦し廣く此經を説くべし」

と謝絶された、これは目前に座せる四衆の人々ではなく、地下にある本化上行等の菩薩に對して仰せられたのである、即ち迹門分、安樂行品の終了を待つて上行等

の菩薩大衆、大地より踊り出でられたのである。

以上の如く、三變土田して十方分身の諸佛を集め、多寶塔を開いて下方の本眷屬上行を召したのは、壽量品の三大祕法を説き顯はさんが爲めで、寶塔涌出の二品が相呼應して居るのは、これで遠近の二序をなせるものなることが伺はれる。

現證の二三

地涌千分(從地涌出品) 天臺大師が「分身既に多し、當に知るべし成佛の久しきことを矣」と歎せられし如く、十方に計量すべからざる分身の佛あり、如何に久遠の昔から十方の土に跡を垂れて衆生救護に奮闘されたかを推察される、然し其度に相當の收獲が無くてはならぬ、即ち衆生教化の成績を示す必要が其處に生ずる、前項寶塔品分身の來集は能化の佛の奮闘の度數を實證を擧げて示されたのに對し、この涌出品はその結果たる所化の數の無量なることを實證する一段である、法華經第

五の卷に、

「娑婆世界の三千六千の國土地皆震裂して其中より無量千萬億の菩薩摩訶薩あり同時に湧出せし、乃至、一々の菩薩皆是れ大衆唱導の首なり、各々六萬恒河沙等の眷屬を將ゐたり、況や五萬、四萬、三萬、二萬、一萬、恒河沙の眷屬を將ゐたる者をや、況や復た、乃至、一恒河沙、半恒河沙、四分の一乃至千萬億那由陀分の一なるをや、乃至、況や復た、一千、一百、乃至一十なるをや、況や復た、五、四、三、二、一の弟子を將ゐたる者をや、況や復た、單だ己れのみにして遠離の行を樂へるをや云々」

何故、斯くの如く、澤山の菩薩があるかといへば、五百塵劫といふ古い昔から教化に盡されたからである、是が、成佛の古い生きた證據、即ち現證である。釋尊が久遠の昔に成佛されたことは當に眞實であるといふことを證據立てる爲めに、一面には十方分身を集め、他面にその教化子を無量無數に集めさせられたので

ある、又本化の菩薩の出現は更に違つた意味が含まれて居る、それは其住處がこの娑婆世界だといふことである、地より涌出したと説かれて居るのは此弊惡に満ちた娑婆世界に住んで居られるといふことである、換言すれば娑婆を離れて佛身を拜することは出来ない、娑婆を離れて極樂淨土は絶対にないといふことを立證するものである。

十大神力(神力品) 偕ていよく佛滅後の衆生の爲めに上行菩薩に本門壽量の三大事を付屬し給はんとするに臨み、更に茲に十大神力を現はし給ふたのである、この現大神力は未來の衆生に此難信難解の法華經を信ぜしめんが爲めで所謂末法流布の妙法の眞實なることを信ぜしめんとする現證である、日蓮聖人は此の十大神力を曇の二瑞には似るべくもなき神力也と、仰せられた、曇の二瑞とは序品の六瑞と、寶塔の出現、本化の涌出を指されたのである、何故にかく本迹二門の瑞相にも遙に勝れて尊い現證を茲に現し給ふたかといふに、未來末法の惡人共はなか／＼のこと

では此の妙法を信じないからである、即ち神力品に「佛の滅度の後に能く是の經を持たんを以ての故に、諸佛皆歡喜して無量の神力を現し給ふ」とあるを拜すれば信ずることが出来るであらう、然らば十六神力とは何か、これをこゝの一つ／＼に就て説明を加へることは省略するが、所詮は末法の衆生をして此の妙法に信を發せしめんとする現證である。

燒臂還復(樂王菩薩本事品) 法華經第七の卷樂王菩薩本事品にお説きになつて居るのに、乃ち過去に日月淨明德佛といふ佛様が居られた、その第一の御弟子に一切衆生喜見菩薩といふ方があつた、此佛様は一期の化導終つた時に、後事一切を喜見菩薩に付屬して涅槃に入り給ふた、菩薩は到つて師を尊ばれるお方で、出來得る限りの尊き梅檀を積んで佛身を茶毘し、その舍利を八萬八千の寶瓶に分ち、八萬四千の塔を立て、盛んな供養を捧げた、然し猶ほ心に足らずと思はれたか、舍利塔の前に御自身の尊い臂を燃して御燈明を供へられた、これを拜するものは皆、現一切

色身三昧といふ功德を得られた、斯くして喜見菩薩は上は師恩に報謝し、下は衆生を導かれた功德を得て満足せられたが、他の一切の人々は自分等の師匠が兩臂を失ふて不具になられたのを非常に悲しまれた、それを見た喜見菩薩は大勢の人を集められて仰せられるには、我が兩臂を捨てたのは佛の金色の身を得んが爲めである、我はその喜びを滿身に感じて居るので、少しも怨んだり、後悔したりしては居ない、然し皆々は私の不具を見て怨んで居るやうであるから、その怨みの本である疑を晴さんが爲めに茲に一の現證を示さう、といふので

「我れ兩つの臂を捨て、必ず南に佛の金色の身を得べし、若し實にして虚しからずんば、我が兩つの臂をして還復すること故の如くならしめ玉へ」といふ實に大きな誓ひを立てられた、然るにこの誓ひを爲し終つて自然に兩臂が還復した、これはこの菩薩の福德智慧が濃厚であつたからこそ、直に現證の利益を得て、誓ひの如く成佛の確さを立證する事が出来たのである、私共も亦念を弘通、

慈悲に専らにし、その成佛を現世の願によりて一心に佛界にかけたならば所願必ずや立所に成就すること疑ふの餘地がないのである。

六根清淨(法師功德品) 今迄は發信門より眺めた現證であつたが、法師功德品の六根清淨は成佛門の上の現證である、即ち眼前の證果、即身成佛である、元來成佛といふことは身と心と壽命との三つが極度に發育延齡したもので、身の發育とは佛身を説くに三十二相八十種好といふことがそれである。心の發育とは所謂「悟」で過去現在未來の三世を十方に通じて掌を見るが如く、その有様、その内面その關係等を知り盡すことである、壽命の延齡とは無量無盡常住不滅、不老不死をいふのである、この三つのことを一言にして盡せば六根清淨の四字に歸する、例へば佛身の三十二相の中、一より二十五までは身根清淨、二十六より二十八までは舌根清淨、二十九より三十までは眼根清淨三十一、三十二は又身根清淨であり、耳鼻の二根は略されて心の「悟」は意根清淨で以上で、六根清淨と稱へられる、第三の無量

無盡の壽命はといふに、これは六根清淨の結果、六根互用と唱へ、六根互に他の五根の用を兼ねることになるのである、この法師功德品は一名六根品ともいはれ、六根清淨の事のみが説かれてゐる、さうして成佛とは六根清淨に外ならぬこと、佛と雖も六根以外には何物もお持ちになつて居ないのである。

増益壽命(常不輕菩薩品) 前に説いた六根清淨は御經に明に『父母所生の』と仰せられてあるから、我等凡身にも直に感得することの出来る御利益であることを信ずる、されどその信を一層確める爲めに實例として常不輕菩薩の御事を掲げやう。常不輕菩薩は末法の初めに修行された一人の菩薩である、このお方は會ふ人、見人總ての人に皆合掌して拜み、さうしてあゝ貴君は尊き佛性を具へて御座る、修行してお研ぎになれば立派な佛様になれます、それ故私は貴君を輕しめませぬといふので人が仇名して不輕菩薩と呼んだのである、然し、斯の言葉を聞いた人々は、なんだ青二才、お前なんかのいふことを誰れが信ずるものか、餘計なことを申すな、

馬鹿野郎と惡罵を加へ、その上石や瓦を投げ付け、棒で打つたりするので、菩薩はスーッと其處から逃げて、又向ふの方から私は貴君を輕しめませぬ——と同じ事を申された、この菩薩の壽命が盡きて臨終されやうとした時、何處からともなく威音王佛のお説き遊ばされた法華經の二十萬億偈の御法門が聞えて來た、それを聞いた不輕菩薩は一句一偈も漏らさず身心に頂戴された爲めに、六根清淨の功德を感得されそのため、壽命が二百萬億歳も延びて更に人の爲めに、その感得された法華經の法門を弘通遊ばされた、六根清淨の佛身であるから、大神通力あり大雄辯力ありて聞く人皆隨從されたといふことである。

この物語の不輕菩薩こそ我が釋迦牟尼如來の因位の御修行であつたのである、祖師日蓮聖人は

『日蓮は是れ法華經の行者なり、不輕の跡を紹繼す』
と仰せられ、日蓮宗は不輕宗とも申すのである、さうして又

『一代の肝心は法華經、法華經の修行の肝心は不輕品にて候』
とも仰せられた、即ち不輕品の所説はその儘、我等信者の手本であると同時に、
その六根清淨、増益壽命も亦我等信者の得分であらねばならぬ。

布教法としての現證

大白牛車の譬喩 茲に説かんとするは布教法としての現證である。即ち成佛の第一歩、入信の門を開くための現證である、先づ初めに法華經第二の卷、譬喩品に三車と大白牛車の譬へがある。

昔、大福長者があつた、この人の家は五百人からの家族が居るのに、出入には狭いたつた一つの門があるだけである、處が或る日火事が起つた、この時長者は、どうしたならば無事に大勢の者を助け出すことが出来るかと心配して一策を案じ出した、即ち經文に

『汝の欲する所に隨つて皆當に汝に與ふべしと、爾時に諸の子、父の説く所の珍玩の物を聞くに其の願に適へるが故に心各々勇銳して、互に推排し競ふて共に馳走し、争ふて火宅を出づ』

といふのがそれで、お前等の好きなものをやるから早く出て来いといつて子供等の無事なるを得た、そこで、長者は大白牛車を引き出して、これに皆を乗せて四方に乗り廻したので、子供等は

『各々大車を得て未曾有なることを得たるは本の所望に非ざるが如し』

と經文にあるやうに、約束は違つたが、望外の事を得てその所望とは違つたが、非常に喜んだといふのである。

この話をされた釋尊は舍利佛に對して『お前はこの事を如何に思ふ、三車をやるといふて大白牛車をやつた長者は嗔付といふ非難を受けるのが當然ではあるまいか』と問はれた、然るに舍利佛は答へた。

「どうして非難がありませう、假令一物を與へずとも火難を免れ、命を助けられたのですもの、況んや望外の車を賜はつたのですもの」
と申上げたので佛も満足された、方便とか手段とかいふのはこの事である、貧賤痴の三毒の火の熾んな三界の火宅を免れ、三災四劫を離れた常住の淨土、本地の娑婆世界に住ましめたいと思ふて現證の利益、即ち今その人が最も欲する所のものを與ふるといふことで先づ入講せしむることがどうして嘘付であるか、どうして非難されることがあらう、たゞ病を治するのみでなく、これより以後の現世安穩、未來成佛の大快樂を與ふるのだもの、望外の車を得た喜びとも比すべきではあるまいか、日扇上人の御指南に

「現證の利益を以て教化する時は三類の強敵感心歸服す」

とあるのも亦實にこの謂ひに外ならぬのである。

如來壽量品の中に病子と良醫の譬話がある、病氣の時こそ最も神佛に縋り付き

たいやうな心持になつて居ることを證據立てる一つの例話である。

「或る處に上手な醫者があつた、或る日その醫者が往診に行つた留守中に、大勢の子供等は藥室に入り込んで、何か甘い物と思つて毒藥を飲んで了つて非常に苦んでる處へ父なる醫者が歸つて來た、そこで解毒劑を調合して片端から飲ましてやつたので、素直に飲んだ子供は苦みが抜けたが、心が顛倒してどうしても藥を飲まない子供もあるので醫者も途方にくれた、この時「父是の念を作す——此の子慙れむべし、毒に中られて心顛倒せり——我れ今常に方便を設け此の藥を服せしむべし」といふ事に氣がついて「汝等當に知るべし、我今老衰して死の時已に到りぬ、是の如き藥を今留めて此に在く、汝取つて服すべし」とて、その子の枕元にその良藥を置いてふらりと出かけた、さうして、使をやつてお前の父は死んだと告げさせた、これを聞いた子供は非常に驚き悲んで、モウ自分を助けに來てはくれないのかと、嘆き悲んだので、その爲めに心が正氣に歸つた、正氣になつ

て見れば枕元に父の残してくれた良薬がある。早速これを飲み盡して毒を下し、苦惱から逃れることが出来た」

茲で注目すべきことは、この狂子が正氣に歸つたのは非常な悲嘆に遭遇したためである、父の死といふ一大事に逢着して「この心遂に醒悟し」たのである、常に順境にあつて人生を樂觀する人には眞面目な氣持はなか／＼来ないものである、法華經を信行する私共が、病氣にかゝつて醒悟し易い心持にある人々を教化して、一はその病苦を救ひ、他は現安後善の眞淨大法を持たしめることに銳意することは當然である。

妙莊嚴王品 昔、光明莊嚴國に妙莊嚴王といふ王があつた、その王子に淨藏、淨眼といふ人があつた、この二王子は雲雷音宿王華智如來に師事して法華經の講説を聽き信者となられた、然るに父王は波羅門教に深醉して佛の教を聽かれなかつた。道心堅固の二王子は是非出家したいといふので、この事を母の淨徳夫人に相談せ

られた、その時お母さんは、お父さんをつれて行くやうにと言はれた、そこで二王子は佛様の許へ父王を參詣させたい一心から十八變の神通を現じた、即ち

「こゝに二子その父を念ふが故に、虚空に踊在すること高さ七多羅樹にして種々の神變を現す、虚空の中に於て行住坐臥し、身の上より水を出し、身の下より火を出し、身の下より水を出し、身の上より火を出し、或は大身を現じ、虚空の中に満ち而も復た小を現じ、小にして復大を現じ、空中に於て滅し忽然として地に在り、地に入ること水の如く、水を履むこと地の如く、是の如き等の種々の神變を現す」

といふやうなことをやつて父王に見せたので、父王もすつかり感心して

「時に父、子の神力是の如くなるを見て心大に歡喜し未曾有なることを得、合掌して子に向て言く、汝等が師は爲めて是れ誰れぞ、誰の弟子ぞ」

と尋ねられた、そこで、二子は空中から下りて父王を佛の御許に同伴し、雲雷音

宿王華智佛を拜せしめ、これが私共の御師匠様であると申上げ、こゝにその心願を成就して出家されたといふことである、いか程口を酢にして説法しても頑として聞き入れない父王も、この神變にはころりと參つて了つたのである、不思議な現證には感心歸伏して忽ち結構な信者になつたのである、これ等の實例は如何に現證利益の布教法としての巨きな力があるかを物語るものであつて、敢て我佛立講のみの布教法ではないのである。

六、日蓮聖人と日扇上人

日蓮聖人の御一代

妙法の功力を説かんとするにはどうしても開祖日蓮聖人は如何なる御方であるかを知らねばならぬ、上行菩薩の再誕として末法の世に法華の大法を弘通する爲めにこの世に出でられた大導師たる祖師の御一代こそ、我等法華經の信者の知らねばならぬ龜鑑である。

日蓮聖人は承久四年二月十六日、安房國小湊に生れられ、父は貫名次郎重忠、母は梅菊と申された、その誕生は母上が大日輪に祈願せられた結果であるといふので、幼名を善日鷹と申された、十二歳の御時、小湊から一里餘の清澄山にある清澄寺に入り、住持の道善に師事せられ、名を藥王鷹と改め、五年間孜孜として修學せられ

本堂の前なる大虚空藏菩薩に「日本第一の智者となし給へ」と祈願せられた。さうして聖人はその學問の進むに従つて當時の日本國の國情に疑問を持ち、當時の宗教界のいろ／＼の宗派に對して疑問を持つに到つた、十七歳にして鎌倉に遊學せられ、こゝで又五年間を勉學に没頭せられたのである、それでも尙ほ満足するところが出来ず、二十二歳の御時には遠く京都の叡山に上られ、三十一歳までの約十年間を日夜研究に寧日なく、その間には近江の三井寺、奈良の各寺、高野山等にも遊學して佛教の眞髓を極むることに努力せられ、その折々の寸暇には京都で儒教や神道の事に就てもその道の大家を歴訪して修學せられた、實にこの二十年間の研究修學の結果、聖人の佛教に對するお考へが確立したのである、即ち佛教の眞髓は本門の法華經である、法華經を弘通することが釋尊の御意志であり、末法の世に弘むべき教は之れより外にはないといふ事を、ハッキリと覺悟せられたのである、而かもその御年は釋尊が成導せられたのと同じ三十二の御年であつた。

斯くして開宗の御決心が確立したので聖人は叡山を去つて、伊勢大廟に詣で、開宗の趣を奏上し、十二年振りて安房の故郷へ歸られたのである。

時は建長五年の春四月も末の八日、清澄山の旭の森の關を破つてさし昇る大日輪に向つて一人の法師が、大空にも大海原にも響けとばかり大音聲に、南無妙法蓮華經のお題目を十たび唱へたその獅子吼こそ自ら我は法華經の行者日蓮なり」と叫んで世に現はれた高祖日蓮聖人の立教開宗であつた。

日蓮聖人開宗の儀式は實に唯だこれだけの事であつた、けれども、この簡單な儀式こそ寔に壯大深甚の極みであつた、佛滅後二千二百年、初めて末法下種の『南無妙法蓮華經』の御題目の聲が、世界に向つて發せられ、全世界一切の衆生を救ひ導くべき妙法の生命はこゝにその源を開いたのである。

續いてその日の正午、清澄寺の南面堂に於て、立宗最初の法門が開かれ、近郷近在から集まつた人々は境内に溢れ、地頭の東條景信も亦その中に參加した、これ等

の人々は二十年の研學を積んだ青年僧の口から果して如何なる妙説が聞かれるかを非常な興味を以て期待した、然るに聖人は開口一番、彼の有名な四大格言を喝破せられたのである。

念佛無間、禪天魔

眞言亡國、律國賊

諸宗は無得道墮地獄の根元

法華經獨り成佛の法

この聖人の宣言は、從來の佛教に歸依して居た人々には全く以て青天の霹靂で、たゞ啞然として驚くばかりであつた、殊に地頭の東條景信は念佛宗に歸依して居たので、非常に怒つて地頭の權力を笠にして聖人を無き者にしやうとして迫害するに到つた。

元よりかゝる迫害は覺悟の事であつた聖人は、唯だ自分の爲めに師の道善に累を

及ぼすことを心配して、この故郷を離れ、兼ての目的地である中央政府の所在地たる鎌倉へと出向かれた。

聖人の開宗第一の入信者は實に聖人の兩親であつた、父は妙日、母は妙蓮といふ法名を受けて妙法に信行されることゝなつたのみならず、聖人最初の法門を聞いて心私に思ひを寄せたものは聖人の昔の同輩であつた淨顯房、義淨房の二人で、裏山づたひに忍び行く聖人の道案内をして別れを惜んだ。

頃しも北條一門の歸依を荷ひし五山の堂塔は塵外の月を指して見性成佛を教へ、人間の無常を誘ふ八宗の伽藍は他力本願の念佛を唱へ、一代の名僧は武門の繁昌と共に泰平に眠れる時、この日蓮聖人の立教開宗は五山八宗の墮眠を破るべき曉鐘であつた。

ましてや五代の執權として武威に赫やく北條家をも恐れず、そのお膝下に現はれた日蓮聖人は男々しくも鎌倉第一の繁華の通りである小町の眞唯中に突立つて辻説

法を始めた。

「さめよ人々、眼前その身を二人の父なく、二人の母なくて生れたる人々、仰ぎ見よ、天に二日なく、俯して見よ、地に二主なく、まして十方法界の大恩教主たる佛の道に、何を八宗十宗の差別あるべき、大聖釋迦如來、將に涅槃の雲に隠れんとし給ふ時、出世の本懐、一代の結經とせられしは只これ法華經の唯一乘なるぞよ、されば爾前の四十餘年、華嚴、阿含、方等、般若の一切經は皆これ三乘方便の權教として四十年未顯眞實と宣ひ、無二亦無三と説かれたり、その眞實こそ五味中の醍醐味、かくも尊き一乘根本の法華經ありながら、實經に迷へる權教の法師ども、淺ましや眞理の月に妄執の雲を添へて、無上道の直路を塞ぎし中にも、わけて法然の如き謗法邪智の徒輩、瓦礫と寶珠の辨へさへなき末代混濁の惡世に乗じて凡下凡俗の愚人を唆かし、自己が選擇集一卷の爲めに三世諸佛の眼目たる此の法華經を捨擱擲せよと教へし彌陀の念佛宗は疑ひもなき五逆罪の墮地獄な

り……いかに人々、無明の睡眠より覺めよ、仰げよ人々、南無妙法蓮華經』
と、彼の四大格言を振りかざして、他宗の誤りを根本から説破してこそあるすので、正法の何たるかを知らざる人々は徒らに惡口雜言を爲せるもの、如く思ひ、僧侶などは聖人の説が正しくとも、自分等の立場が危くなるので聖人への迫害は日に／＼加はり、瓦石を投げ付け、刀を抜いで脅かすといふ有様であつたが、聖人は平然として少しも怖れず、これを續けられた。

聖人が鎌倉に現はれて幾何もなく、曾て叡山で聖人の人格に心を寄せた成辨が突然聖人の松葉ヶ谷の草庵に訪ねて來た、その翌年には下總の平賀次郎の一子吉祥磨が十二歳で入門して來た、之れが後の日朗上人である、この二人はこれから數年に亘る鎌倉の聖戰に絶えず聖人の傍にあつて聖人を助けた。

尙ほ聖人の説法の尊さに隨喜して、四條左衛門尉頼基、進士太郎善春、房州天津の豪族工藤左近之丞吉隆、池上左衛門太夫志宗仲、荏原左衛門尉義宗、甲州の豪族

南部六郎太夫實長など、いふ相當の武士が次々に歸依したのである。

かくて聖人三十九歳の御時にはその一代の名著ともいふべき『立正安國論』を書いて之を時の執權北條長時に示した、その論旨は「正しい教につけば國は安泰であるが、今日のやうに誤つた教を奉じては天變地異は引つゞいて起り、國は亂れるばかりで、必ず内亂が起り、外國から攻め亡ぼされるぞ」といふ憂國慨世の叫びである、これに驚いたのは各宗の僧侶どもである、何とか聖人を無きものにせねば自分等の立場がなくなるといふので、幕府の高官に頼み、自分等の信者を唆かして松葉ヶ谷の草庵を焼打させ、無法にも聖人を召捕つて伊豆へ流罪にしたのである。

この流罪の目的は聖人を殺さうといふのであるから、伊東の沖の俎岩へ聖人を置き去りにしたのであるが、奇しくも危機一髪にして同地の漁夫上原彌三郎が聖人を助けて我家へ連れ歸つたので事無きを得た。

それから四十二歳にして鎌倉へ歸られる迄の三年間、伊豆に滞在して、先づ土地

の地頭伊東八郎左衛門尉の重病を癒して歸依せしめたのを手始めに、多くの信者を得られたのである。

聖人の父上は聖戦に忙がしい聖人三十七歳の時亡くなられ、聖人四十三歳の時母上重態の報に接して急ぎ歸郷せられたが、既にこと切れて居られたのを、聖人の熱いお祈りで甦られ、その後四年間も生き延びられたのである、その時天津の豪族工藤吉隆の招きに應じて天津へ行かれる途中、小松原に差しかゝつた時、數百の伏兵に襲はれ、弟子の鏡忍と工藤吉隆の兩人は討死し、聖人も眉間に傷せられたが、御命には恙なかつた。

それから、房總地方の教化に當られて居る時、文永五年蒙古の使者が來るといふ騒ぎが起つて、立正安國論の豫言が悉く適中してゐるに關らず、時の幕府は一向に眼が覺めない、殊に極樂寺良觀と零法のことにて對決せられ、聖人の勝利に歸したのが累となつて、彼れ等の奸計に依り遂に聖人五十歳の御時佐渡遠流となつた。

佐渡滞在中の聖人の日常はまことに辛酸の極みであつた、その御事蹟はいろ／＼の傳記に記されて世人の熟知する所である、さうして五十三歳にして漸く赦されて鎌倉へ歸られる迄の四年間に殆んど佐渡全島の住民を法華經に歸依せしめられ、諸宗の僧侶なども聖人の説法を聴き、法華に改宗する寺も少くなかつた、この間にあつて聖人は「開目抄」「観心本尊鈔」などの有名な御書を著はされた。

かくして聖人の存在は全日本のものとなつた、そこで幕府も止むなく法華の宗旨を認め、弘通も許し、寺も建て、やらうといふことになつたが、聖人は幕府の申出も顧みず、飄然として身延山に入られた、身延山は早くから聖人に歸依した南部六郎實長の所領で、この山を聖人に寄進してお迎へしたのであるから、如何なる寺でも建立しやうといふのを謝絶せられた聖人は五十三歳にして、入山せられ、六十歳にならるゝまで、西谷といふ所に雨露を凌ぐだけの小さな草庵を建て、聖居とされたこの草庵が十間四面の建物となつたのは實に六十歳の御時であつた、斯くて聖

人は六十一歳の御時まで一步もこの山を出でられず、末法萬年の衆生を濟度すべき基礎を定められ、教義として永遠に傳ふべき御書の著作を完成され、集ひ來る信者を教化せられつゝ、即身成佛の範を示されたのである。

弘安四年、御年六十の時、蒙古襲來して我國運の危きこと累卵の如きものがあつた、この時聖人は護國曼荼羅を圖出して蒙古調伏を祈られ、この大國難をして無事なるを得せしめられた、その年十二月發病せられ、御不例が續き、聖人も自ら涅槃の近づけるを知られ、釋尊が拘尸那揭羅を入滅の地と定められ、王舍城を立出でられた故事にならばれ、翌年の九月八日身延を立出でられて、十八日武藏玉川の邊り千束の郷なる池上宗仲の館に入られ、此處を臨終の地と定められた、その二十五日門下を集めて立正安國論を講じて告別せられ、十月八日には六上足を定めて宗門の後事を授け、數日の後、即ち弘安五年十月十三日辰刻、遂に大涅槃に入られた、その時地震あり、晩秋の庭には櫻花が咲き亂れて居たといふことであつた。

十二歳にして佛門に入り、二十年の苦學研鑽にてその眞髓を極め、三十二歳にして開宗の叫びを擧げられ、その後六十一歳にして涅槃に入らるゝ迄法華經の宣布弘通の爲めに、あらゆる迫害に抗し、幾多の苦辛を耐えて、遂に妙法の功力を世に知らしめられた聖人の偉大なる御事蹟を偲び奉る時、我等は自らその頭の下るを覺ゆるのである。

佛使としての聖人

日蓮聖人は幼にして佛門に入られ、その學問の進むに従つて先づ第一に疑問を起されたのは、同じ佛様の教である佛教が、何故いろ／＼の宗旨に分れ、各宗並立して居るかといふ事であつた、さうして從來の僧侶が佛教の眞髓を理解して居ないといふことが、その原因であることを達觀せられ、その眞髓は實に法華經であるといふことに到達せられたのである、日蓮聖人の二十年間の研學修業は、佛の教にも權

教と實教との別あることを明にせられ、その實教の眞髓たる法華經を弘められて佛の何たるかを現はし、正しき法、正しき教、正しい信心の何たるかを示されたのである、こゝに日蓮聖人の他の宗派の僧侶と比ぶることの出来ない偉大さがある。

日蓮聖人は又、時代を適確に見極められたことに於て驚嘆に値するものがある、即ち佛様が法華經をお説きになる時、これは末法時代に弘通すべき法であることを明言された、聖人は鎌倉時代の世相が理非順逆の區別もなく、世は末法に入り鬪諍堅固の時代となつて居ることに氣付かれ、この時こそ妙法世に出づるの時なりとして敢然として立たれたのである、所謂、時代を見るの明に於て傑出せられて居たのである。

聖人の開宗は極めて簡單であつた、聖人のお考へとしては、「自分は上行菩薩の再誕として佛の使として世に現はれたものである、佛様の御趣意に違はぬやう、本當の教を世に弘めるやうにすればよい、誰れに相談することもない、我心中たゞ本佛

と一切衆生あるのみ」といふことであつた、お題目を日輪に向つて唱へられたのは、佛の功德を一切衆生に施すといふお心持であつた、我等法華の信者たらんものは、この聖人のお心持を體行せねばならぬ。

法華經の中には、未法時代にこの大法を弘通する者は、三類の強敵に抗じあらゆる迫害と戦ふ覺悟が必要であると説かれてある、聖人の弘通にも幾多の法難が次ぎから次に起つて居ることは餘りに有名なる話である、法華經の豫言通り、三類の強敵は續々と現はれ、刀杖瓦石遠流の大難は次ぎ／＼に襲ひかゝつたが、聖人は鐵のやうな御意を以て之れと戦ひ抜かれたのである、さうしてその結果は妙法の現證を知らしめ、その功力の偉大なるを證據立てることゝなつて、遂に最後の目的を達成せられたのである。

こゝに他の凡下の僧侶どもの眞似も出来ないほど聖人の傑出された偉大なる鐵石心を見る事が出来るのである。

聖人の御書の中に

「但し、八萬聖教の肝心法華經の眼目たる妙法蓮華經の五字をば、迦葉、阿難、にも譲り給はず、此場の大菩薩等の望み申せしかども、佛許し給はず、大地の底より上行菩薩と申せし老人を召し出して多寶佛、十方の諸佛の御前にして釋迦如来七寶の塔中にて妙法蓮華經の五字を上行菩薩に譲り給ふ(中略)小乘經、大乘經、殊に法華經は文字はありとも、衆生の病の藥とはなるべからず、所謂病は重し藥は淺し、其時上行菩薩出現して妙法蓮華經の五字を一閻浮提の一切の衆生に授くべし、其時一切衆生此菩薩を敵とせん」

とある通り、聖人は常人でなく、法華色讀に依つて上行菩薩の再誕であることが明に證明されたのである、日蓮聖人こそは實に上行菩薩の再誕として未法の世に法華經の弘通に當るべく、釋尊の定められた大導師であつたといはねばならぬ。

佐渡で書かれた「開目鈔」の中にも、「人間としての日蓮は既に龍の口で首を斬ら

れた、之からは靈の日蓮、即ち上行の再現として、法の爲めに盡す』といふ意味が書かれてある、釋尊が法華經をお説きになる前は教も方便説であつたと同様に、日蓮聖人の御法門も、佐渡前と佐渡後とは確然區別される、即ち佐渡前の御法門は迹門に屬し、佐渡後の御法門は本門に入られたのである。

聖人が彼の有名な三大誓願

我れ日本の柱とならん

我れ日本の眼目とならん

我れ日本の大船とならん

を發表せられたのも佐渡後である、また宗門としては三大秘法として

本門の本尊

本門の戒壇

本門の事行

といふ方式を定められたのも亦この後のことである、御題目は既に開宗の時に唱へになつて、それを本尊とすべき事は定められたが、佐渡に於ては之を圖解せられ、本尊としてお祭りすべきことを明示せられた、この本尊をお祭りする所を御戒壇とし、その前で唱題することを修行の方法であると定められて、三大形式を定められたのである。

佐渡から歸られて身延山に入られて後の御生活は大導師としての本領を發揮して本佛に仕へることを身を以て範を示され、教の眞髓を後世に傳へる爲めには四百五十篇といふ大部の御書を遺されたのである。

聖人が佛使として本佛に事へ、一切衆生の教化に盡された總ての御事蹟は一々私共の手本として拜行すべき所である。

日扇上人の御一代

日蓮聖人の御一代を略記した私はこゝに聖人の御教を正しく守つて本迹一致の暴論に抗し、本門法華の正統を傳へんが爲めに、敢然として本門佛立講を開講せられた日扇上人の御一代を記し、佛立講がどうして、如何なる時に開講せられたかを説いて佛立講の教義に論及せねばならぬ。

日扇上人は文化十四年四月一日、京都蛸薬師室町西入姥柳町の民家に生れ幼名を仙二郎と申され、後に仙右衛門と改められた、近江源氏の佐々木を祖として、氏は大路、後に長松と改められた、祖父延貞は信濃と稱して白川殿の御内人であつた、父は淨喜、母は國と稱し、母は書道に堪能であつた、祖父延貞は平曲に長じ、茶歌、書畫に通じて居た、上人の家は古來文藝の遺傳があつた爲めか、上人も亦七歳の時圓山存古齋に從つて書を學び、漢籍を奥田佐二右衛門に學んだ。

九歳にして髮置をなし、白井華陽の門に入りて畫を學んで、號を仙桂、後に三高字を士龍、名を魚と稱し、後に延禎と云ひ、清風、無貪なども號した、天稟の英

才は幼にして現はれ、十歳の時、平安人物誌の書畫の兩部にその名を列ね、雅致飄逸の畫風を以て天晴れ天才畫家として推された、十三歳の時、栗田青蓮院宮の御内人勝見主計に從ひて書道を學び、十五歳にして山田兵庫に師事した、斯くてその非凡の才識は年と共に進み、數々養子に望まれたが、志ある身なればとて、固くこれを辭した。

十七歳にして瀧本流の書風を學び、元服して城戸千楯翁に國書と和歌を學んだ、さうして忽ち四百餘人の門人中に頭角を現はし、選ばれて毎月千種殿へ赴き源氏物語を進講した、時に年二十五、國學の造詣はなかくに深かつたのである。

けれども、上人も亦その青年期に入るに及んで、漸く人生の懷疑に悩み、一たびは參禪してこの悩みから解脱しやうとしたが直指人心不立文字の禪は遂にこの青年の懷疑を解くことが出来なかつた。

かくて上人の宗教心はいよ／＼根ざし深く、或る年病を得て能勢の妙見に參籠し

て一七日の水垢離を取つたことさへあつた、然るに天保十三年の三月、上人二十六歳の時、母上の國女は享年四十八歳で此の世を去られ、上人の悲嘆は例ふるにもなく、この一大衝動に遭遇して心機は急轉し、厭離の志いよく堅く定まつたのである。

幼にして父を喪ひ、母上の慈愛に人となり、杖とも柱ともかしづき慕ひし母上の死に會ひて悲痛哀悼の極みに身も世もあられず嘆かれし上人の心情は實に左の悼歌に盡されて居る。

西に行く月よいざなへわが母は死出の旅路に今日立ちにけり

思ひきや散り行く花のはかなさを今年は親の上に見むとは

忘れては寝ざめに親のありと思ひ夢と知りての後ぞ悲しき

ちるまでも見てだに花にあかざるをあな心な夜の嵐や

おもかけのおしはかられて悲しきは母の朝よひ身になれしきぬ

上人のかゝる悲痛落膽は遂に上人をして出家を發願せしむるに到つたのであるが何や彼や浮世の義理に妨げられて、暫らく京都を離れて、この痛苦を忘れる爲めに江戸に出られたのである、さうして羽田村の松崎慊堂を訪ねて師事せられたが、その後重病に罹り、死生の巷をさまよはれ

玉の緒を此の世かの世によりかけてひとすぢならぬ己が身を今

と詠ぜられて靜に天命に安んじられたのである。

江戸の滞在久しからずして京に還り、二十八才にして眞言宗を研究し、叡山に登つて臺密の奥義を究め、その傍ら書道歌道を指南して門人數十人に上つた、二十九歳の時、本能寺の貫首日隆上人に謁して本門法華宗義を受けられ、三十二歳の時、最初に信仰の導きをしてくれた本能寺塔中、長遠院日雄師の傳書を受けて、當時學匠として宗門に聞えた淡路津井の隆泉寺心光院無著日耀上人（後に大本山妙華寺貫首）に入門して剃髮出家の志を遂げられたのである、この日は實に高祖大師の立

教開宗の日に相當してゐた

その後上人は日耀上人に従つて修業に怠りなく、上人の學識才能は忽ち大衆を驚かすほどに進んだ、さうして京都に歸つた上人に、同信の村上勘兵衛、村田麥浪の兩人が

『よし、檀林の修業に幾年を費し、一ヶ寺の住職となりたればとて衆生濟度の功なくば何の詮かあらん、寧ろ速に一人たりとも教化せらるゝこそ佛祖への奉公ならん』

と説き勧め、東山の西行庵の無住なるを幸ひ、こゝを假りの住居として在家宗としての旗上の準備を進めつゝ、日々の日課として讀誦、唱題、或は寫經などを怠らず、妙法の修業に精進したので、上人の法義に共鳴するもの次第に多く、逢ふ人毎に折伏し、經力によりて病氣を治しなどして、二年餘りをこゝに安住する間に、上人の噂はこの近郷近在に高まつたのである

上人の噂高まるにつれて他宗の壓迫いよく烈しく、遂に西行庵を追はれ、新門前の板本寛藏の隠居所にその居を移し、先づ寛藏を教化し、附近の男女を教化しつゝこゝに一年餘を過して又も追立てられ、遂に蛸薬師の舊宅に歸り、暫らく袈裟をたゝみて俗の姿となり、禪門清風と稱して隠れ住んだ

此の時、讃岐高松城主の舍弟松平左近公が三途不成佛といふ論を立てられ、宗内は敵味方に別れて議論が沸蕩した、その指導を受ける爲めに同公は上人を招聘し、疑問を解くを得た、上人は高松に滞在中日々夜々法門を開いて弘通に努めた、左近公は書を京都町奉行並に寺社奉行淺野和泉守に送つて上人の本門佛立講の結構、法義弘通随意の許可あらんことを請ひたれば、和泉守は直にこの請ひを容れ、左近公所撰の講名を書いて與へた、斯くて安政四年一月十二日八品堂に於ける本門佛立講の開講が行はれたのである、今日幾十萬人の信徒を有する大宗教もこの時の門弟僅に五人であつた

當時、世の中の物情騒然たる間にも、單り佛立講のみは上人の不斷の努力、不惜身命の功現はれて、日に月に信者益々増加して、大津佛立講の開講など相次いで、廣宣流布せられたのである。

佛立講の勢ひ日々盛んなるを嫉み、大津の天臺、淨土、一向、本迹一致等六十四箇寺の僧侶どもが一致して之が撲滅を企て、佛立講を切支丹宗として讒訴したので、上人を始め、京大津なる一門の人々悉く捕へられて獄に投ぜられたが、時の京都府知事長谷少將信篤の判決は公明であつた、さうして

『今、大津清風、その方の疑は相霽れた、願の通り出家を許す故、いづくにて弘法致すとも差支がない、出家願を出すがい』

と言ひ渡されたので、上人は直に出家を願ひて許され、本能寺貫首日熹上人の弟子となられた、これが上人第一の法難である、この法難が上人の御一代に一新紀元を劃する動機となつて、明治二年の一月には妙蓮寺の貫首日成師に請ふて同山の末寺

宥清寺を借受けて佛立學修所とせられた、即ち諸國佛立講の學文所として佛立講の寺とせられた

斯くの如くして佛立講の基礎漸く確立し、信徒四方に増加するにつれて、信徒の中にも不信謗法の徒を加へ、明治十六年七月にはこれ等不信の輩が數百名一時に脱講して本能寺附檀となり、叛旗を翻へし、佛立講に對して宣戰を布告した、乍然これ等烏合の衆の妄動にては微動だもせぬ程にその基礎が固まつたのである、されど上人は當講の將來を懸念して同月二十六日、六十七歳にして高弟御牧現喜に大法弘通の讓狀を附し、自ら下京の俵屋町へ移つて此處を隱棲の地とせられた、これから信徒は上人を大尊師と敬ひ奉つた

退隱後の上人は著述にいそしみながら尙ほ弘通折伏のつとめを怠らなかつたが、明治十九年になつて死期の近づけるを知り、自ら碑を宥清寺の裏に建て、表面には自筆の首題を到み、なほ『明治十九年四月一日長松清風生年七十歳建立』と署名した、

遷化後遺骨をこゝに納めた

二十一年には新會場で無病臨終宣言があつた、

清風兼て申置候事

清風はやまひなしにて死ぬなればこのよし申傳へ給へよ

いつといふこと知れ申さず候間今から惣講の御面々にたのみ申置き候也

時に明治二十一年戊子八月二十九日

本年七十二歳に候也 花押

惣講元役中御人々へ

と記し死の覺悟を定められたのである、此の頃から上人の御身は非常に衰弱し、

不例に覺えられたが、明治二十三年弟下講下へ

當講の内講元副長諸組の面々清風歸寂の後には弟子現喜を二代目の導師、それがしの代りと尊敬して當流の御法義を謹みて堅くお守り繁榮を祈らせ給へ、かしこ

清風

本門佛立講一般諸組の面々

上人の衰弱は日に／＼加はつて死期は日に／＼近づいたが尙ほ努めて自ら法門を

なされ、無理にも修行日には出講せられた

明治二十三年七月十七日、大阪の信徒秦氏の招きに應じて弟子二人を共に、多數

信徒の見送を受けて京都を出發し、淀川を船で下る途中、暑氣に堪え難く、大阪府

下守口で上陸して休憩中、眠るやうに臨終せられたのである、時に御年七十四であ

つた、これより先き六月十五日神戸の信徒へ與へられた手紙の末に

思ひ見れば年は七十路あまり四つ御用濟みにて歸るのである

といふ一首が添へてあつた、斯様にその死期を知りながらも倒れて後止むの言葉

通り最後まで法門に努められた上人の御志は日蓮聖人の

『命の通はんきは、南無妙法蓮華經と唱へて唱へ死せよ』

と仰せられた御教を身讀されしものと言はねばならぬ、又御教歌に
死ぬること案じてゐるも無益なりいけくばたり唱へ死せん
死ぬること御題目に御安心今がいまゝで唱へ弘めよ
とある通り、日頃の御教を自ら實踐躬行せられたのは實に尊敬すべき御努力であ
つた、生涯墨染の一沙彌で過されたが、遷化後、その布教の功大なるを以て一躍、
權大僧正を諡られ、更に又大僧正を追諡せられた、上人の御遺詠實に數千首、御遺
書亦數百卷に上り、その御業蹟は實に開祖日蓮聖人に次ぐものと言ふべきである。

上人の布教と遷化後の佛立講

日扇上人遷化の後、その遺旨を稟けて第二世となられた御牧現喜師は近江追分の
人、御牧卯兵衛氏の長男として生れ、十歳にして日扇上人に従ひ、十七歳にして薙
髮し、妙法の研鑽、佛立講の弘通折伏に努力せられた、明治十一年の頃、本門法華

宗内にて、十界の衆生は即身成佛するや否やに就て議論が岐れた、その時日扇上人
の現喜師は妙蓮寺の論者となつて東京に出で、殊功を現じ、名聞一時に宗門を壓し
た、明治十五年、京都宥清寺の住職に擧げられ、大津追分の佛立寺の住職を兼務せ
られ、専ら力を教化弘通に致し、明治三十五年の春には神戸市荒田町に佛立寺を建
立し、明治三十七年の夏、上總の大本山鷲山寺の貫首となられ、明治四十四年、京
都大本山妙蓮寺に晋みて大僧正となり、當宗の管長たること二度、長くも明治天
皇の拜謁を賜はつた

明治四十四年八月二十五日、五十九歳を以て遷化せらるゝ迄、その一生を開導上
人の偉業を助けられ、上人遷化の後には遺業を嗣いで當講の廣宣流布に身命を抛つて
盡された功績は佛立講史上に特筆すべき御方である

開導上人御一代の布教の方法は、書や歌を縁として發信入講したのも随分多か
つたが、主として病氣で困つて居る人を勸めて妙法を持たしめ、本人に妙法口唱の

行を積ましめて治癒せられ、徐々に教導して佛立主義に徹底せしめられた、さうして信徒の信心を初心、中心、後心の三段に分けられ、初心は自分の事のみ、精進するので、佛祖の教に背かぬやう朝夕御本尊に仕へ、勸行をばけみ、講席や寺へ參詣して法話を聽聞するのである。中心は他を勸めて信心を持たしめる、これを教化又は御弘通の御奉公と申し、自分は又初心の人々の手本となるやう勸行、參詣を勤めるのである、後心は必ずしも學問とか財産とかは問題でない、不惜身命の決定心ある者でなければこゝに進めない、初心から中心へ、中心から後心へと指導するのである。

信徒を教化するには二つの方法がある、一は御講、信徒各自の宅で法席を營みせ、法話をすること、又寺では月に數回參詣日を定めて法門を聽かせる、その時開導上人は經文や祖師の御書などを講説して、その教義を一首の和歌に結び付けるやうにされた、第二の指導方法は信徒同志が相觸れ合ふて行くやり方である、これは病人

の出來た時に助行といふのをやる、助行とは平癒を祈る本人が正行で、これを援けるのを助行といふので、組合の人々は入り變り立ちかはり助行をする、これが幾日もく續くので、信者同志は知らずくの間、堅く結成されるのである、この二つの指導方法が佛立講をして今日の大を爲さしむるに力があつた

開導上人は最初は花洛本門佛立講開發教導師と稱せられ、後に略して單に佛立開導と稱へられ、又講有とも稱せられた、前者は信心上、後者は組織上の役名である、上人の後繼者は第二世が前に述べた日開上人(現喜師)で、三世には日隨上人(野原辨了師)、四世が日教上人(御牧現隨師)、五世は日風上人(小野山清衛師)、六世は日教師(明田現學師)、七世が日淳上人(西村現良師)である

さうして當講は本門法華宗に屬し、京都北野宥清寺を根本道場と爲し、全國各地及び朝鮮、滿洲等に親會場(布教所)が散在して居る、統一機關は法燈相續者「講有」を戴き、行政部としては總務局に總理以下僧俗役員があつて、地方は支部と稱

し、支部擔任（僧侶）の下に支部長以下の役員がある、さうして支部は組を以て組織し、少くとも百人以上の信徒が集まつて組となり、組には組長以下の役員がある、地方支部から講政代議員を選出し、講政會議を毎年四月京都の根本道場で開會することゝなつて居る

七、現證教としての佛立講

佛立講の教義

前に説いたやうに法華經は現證經である、現證を以て一大眞理を顯はしたお經である、此の現證を本とする、教義を根本とする本門法華を開祖の御教に遵つて、正しく解説教導するのが佛立講である、言葉を換へて云へば、佛立講とは法華經を根本とする本門法華宗である、即ち開導上人が開講の初めに仰せられた御趣意は實に左の通りである

『本門法華宗は久遠實成の佛の立てさせ給ひし宗旨なる故に佛立宗といふ、經に云く「諸經中王、最爲第一」斯くの如く立てさせ給ひし故に其趣を解説教導する故に佛立講と云ふ、宗門の本尊は萬法具足の大曼荼羅にして、題目を以て本尊

となす、經に云く「如來一切所有之法」、これ妙法五字に萬法具足の文證なり、此五字、文に非ず、義に非ず、一部の心なりと、行者己心の三千具足三種世間なり、一切衆生語默作々皆一心をもととして起るなり、故に心を一境の妙法に止めて餘念なく平にせしむれば、主に忠、親に孝、の誠の心となり、信心の位にて悟の位に入るの直道、仁義五常の道も自らに立てば現世安穩の法なり、生死に迷はざれば後生善處の法なり、外典に國家を平にする法にも其心を治めしむるをもととす、内典はもとよりなり、過去現在未來の三世の因果をさととして勸善懲惡の法を説き三世安樂の大法をも弘むる現世安穩、天下泰平、後世寂光の福報を示す、是れ本門法華經の大法なり、諸佛諸天を以て本尊とせず、諸佛の師とせさせ給ふ本法を本尊とする、則經文なり、祖師立宗の本懷なり」

日扇上人開講の御趣意は、祖師立宗の本懷を基として、心を一境の妙法に止めしめ、現世安穩、後世善處の法を説き給ふものにしてその御本尊は萬法具足の大曼荼

羅である、日扇上人の御言葉に

「法華經の行者の御本尊は南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經は生身の佛なり、又日蓮大師の御たましひ也、故に文字即佛なり、二なく別なしとは是也、經に云く、此の中に己に如來の全身有す、」

と、即ち日蓮聖人の顯はされた南無妙法蓮華經の本尊を生きて御座します御佛なりと信ずるか佛立講の根本信である、此の中に己に如來の全身有す、とは法華經第四の卷法師品の中にある言葉で、佛舍利をも安置しなくてよろしい、何故なれば、此の妙法蓮華經の中に如來の全身がこもられてある、されば妙法五字を立派な殿堂にまつり、これに奉仕し供養せよとの御意である、元來佛と申すは人間と妙法とが一體となつたお方であるから、妙法を表とすれば、人間は裏となり、若し人である佛を表とすれば妙法は内面に隠れるわけである、故に妙法蓮華經は法面人裏の本尊、佛は人面法裏の本尊で畢竟二者一體である、これにはいろ／＼の義がある、第

一、釋尊出世の時代は所謂人面法裏であるが、入滅後はその遺教が主となるので、法面人裏となる、第二、法華經には本化上行菩薩を召出して我滅度の後、此の五字を以て一切衆生を助けよと仰せられた、而かも、此の五字には如來の一切の所有の法、如來の一切の自在神力、如來の一切の祕要の藏、如來の一切の甚深の事、此の中に宣示顯說す（如力神力品）と仰せられて居るのに見ても、佛名よりも佛像よりも遙に勝れて居ることを御説きになつた、第三は下種の義と約する、下種とは一切衆生の己心に備つてゐる佛性を開顯することである、一切衆生よ汝の心の名は妙法蓮華經であるぞ、釋尊の大悟の奥底であるこの妙法こそ汝等の佛性の名であるぞと教化するのが日蓮聖人出世の使命である、さうして妙法は法の姿を以て顯はされて居るが、その實體は生身の如來である、と信ずるのが佛立講の教である、この理を日扇上人は御教歌に

妙法はいきていますといふことを疑はぬをば信者とぞいふ

と詠ぜられて居る

日蓮聖人は治病鈔に於て

「法華經に又二經あり、所謂の迹門と本門となり、本迹の相違は水火天地の違目なり、例せば爾前と法華經との違目よりも猶相違せり、爾前（法華經を説かるゝ以前）と迹門とは相違ありと雖も相似の邊もありぬべし、乃至なほ本迹を混合すれば水火を辨へざるもの也」

と仰せられて居るやうに法華經中の前の十四品迹門と後の十四品本門とは天地水火の相違があることは一點の疑ひを容るゝ餘地がないのであるが、高祖の御教に違背して、開會の上には本迹一致なり、など、一往勝劣、再往一致の邪義をたて、押通さうとした月明僧正が現はれて、この邪義に迷はさるゝものが少くないのを慨き、敢然としてこの邪説を排撃する爲めに起つたのが本門法華の開祖日隆上人である、處が日隆上人の没後、上人の御本志を習ひ損ずるものさへ次第に多く、一人として

上人の遺志を紹ぐものがないことを嘆かれて起されたのが日扇上人である、日扇上人の佛立講開講は、實に日蓮、日隆兩祖の志を紹ぎ、本門法華の革新と確立とを期する爲めに、實踐躬行してあらゆる迫害を乗り切つて、信行いよ／＼熱烈、寺院佛敎を在家佛敎とし、未來成佛主義を現證利益宗に、讀誦行を口唱行に改められ、八品派開山日隆上人の敎旨を紹述し、その遺訓を忠實に奉行せられて、今日の大を爲すに到つたのである

蓮隆二祖の現證

現證主義の布敎法は、遠くは釋迦牟尼佛を始めとして宗祖日蓮聖人、開基日隆上人もこの方法に依られたのであるが、たゞ道理文證の二門と相並んで行はれたものであるが、日扇上人は専らこの方法に依られたのである、勿論、日扇上人と雖も現證だけに依られたのではないが、對外的の場合には、殆んど總てこの方法に依られた

といつて差支がない程である、開導上人は常にこの現證利益を大上段に振りかざして弘通せられたことは御事蹟に明かなることである

宗祖日蓮聖人の現證利益に就ては彼の大小の御法難が次ぎ／＼に起つたのを悉く乗り越えて御進みになつた御事蹟が、餘りにも有名であるから、こゝに一々これを記すことを省く、殊に御一代の御名著である立正安國論はその言々句々が皆悉く現證主義であると申さねばならぬ、さうしてその現證は豫言となつて總て適中して居ることを忘れてはならぬ、而かもその論中に

「夫れ國は法に依つて昌へ、法は人によりて尊し、國亡び人滅せば佛を誰か崇むべき、法をば誰か信ずべきや、先づ國家を祈りて須く佛法を立つべし」

と仰せられて憂國の御志が火のやうに燃えて居ることを尊敬すべきである、聖人の一生は誠に多難多艱であらせられたが、開目抄の結文に

「日蓮が流罪は今生の小苦なればなげかしからず、後生には大樂を得べければ大

に悦ばし』

と仰せられて、決して現世安穩のみを主義とせられたのではなく、未來の大苦を免るれば足れりといふ御覺悟と御信仰とを拜察されるのである。

開基日隆聖人は宗祖門下の教學のすたれたるを歎かれ、三十餘年の間、眞俗二門の折伏弘通を備置いて研學に精進されたお方であるだけに、道理文證といふことに、力をお注ぎになつた事は、申す迄もないが、それかといつて現證利益をも捨てられなかつた、その一二の例を掲げて見やう。

始め妙顯寺との分離の頃、一室に籠つて讀經三昧に入つて居られた時、月明の廻し者が六人で上人を亡きものにしやうと近づいた、その時御本尊からさつと光明が逆り出て、六人の者は顛倒した、その物音に聖人は始めて氣が付かれた、こゝで六人の者は聖人の非凡のお方であることを知つて、却つて上人に歸依して、六人相談の上、京都を立退いて、河内の三井へ御守護申し、今の三井の本嚴寺が出来上つ

たといふことが傳へられて居る、この御難は宗祖大師の小松原の御法難に比ぶべき大難である、と同時に眞の法體の折伏である。

次に、聖人が三井から尼ヶ崎に至られた時、土地の領主の夫人が妊娠して居た、相續者のない領主は是非男子を欲しいと願はれて居たか、専門家は皆な女子であると診斷するので、非常に落膽して居る時、聖人の巡錫を開き、この大徳の出家に願ひして是が非でも男子を得やうといふことになつて上人を城中に迎へた、そこで上人は變成男子の御祈願をこめられ一百日にして願成就安々と玉のやうな男子が出生した、そこで領主は上人に歸依して莫大な地所と堂宇とを寄進された、これが尼ヶ崎の大本山本興寺建立の因縁であつた。

北國越前地方に巡錫された時にも、疫病退散の祈願が成就して、全村が改宗して寺院を建立したといふことも傳へられて居る、斯様に現證の利益が上人の布教の上になきな力のあつたことを知るべきである。

末法弘通の目的は上に述べたやうに衆生の心の中の妙法を開顯するのであるが、
偕て教化の實際となるとなか／＼耳を傾けるものが尠い、各宗ともに相當に苦心を
して居るやうであるが眞の目的である佛の慈悲に觸れしむることが容易でない、所
が我が佛立講では左程の苦心をせずとも、月に年に大きな成績を擧げて居るのは全
く現證利益のお蔭と云はねばならぬ、日扇上人は末世の悪人には道理や經文を引い
て説明しても到底問題にならぬ、これはどうしても現證利益を以て發信せしむるよ
り外には無いと悟られたのである、御教歌に

いか程に講釋すとも妙法の御利益見ねば信は起らず

目に見えた御利益なくば法華經を眞實經と誰れか知らまし

と御教になつて居るが、日扇上人として決して現證利益の一事に執着して成佛の一
大事を忘れては居られない、即ち

信心といふは佛果を願ふべし今を祈るは皆迷ひなり

いづれをか大事と思ひ惑ふらん未來願はじ此世ともなり
現世より未來大事を行ずれば今世も共に所願成就
と御教歌にあるは這般の覺悟を御説きになつたものとして奉行せねばならぬ要點
である

尙ほこゝに記さねばならぬことは中山派の祈禱と當講の祈願との相違である、即
ち佛立講では信者自身を主とし、彼れは僧侶の祈願を主として居る、例へば此處に
難病の人がある、この難病平癒の現證をお願ひする場合にはその病人自身が當宗に
歸依してゐる信者であるといふことが第一の條件である、若しその人がまだ信者で
ない場合には、先づ謗法拂をして當講所定の御本尊を護持せしめ、本人自身の信行
口唱に依つて現證の御利益をお願ひするのである、殊に彼れ等の現證の祈願は諸天
善神であり、未來成佛の祈願は御本尊であるといふ様に、未來成佛の道と、現證利
益の道とを區別して考へて居る、然るに當講に於ては必らず妙法五字の御本尊でな

くはならぬ、未來成佛も現證利益も、その祈願は一にして二ならざるは當講の他宗と相違する主要點である、そこに謗法拂といふことが起つて來る、處が、世の不信の者等はこれを辨へずして當講の謗法拂を攻撃して邪教扱ひをするに到つては寧ろ噴飯に値ひするものと云はねばならぬ

謗法罪とは

法華經第二の卷譬喻品に十四謗法が述べられてある、即ち法華經の心に背くことが謗法である、日蓮聖人は

『謗法は無量の五逆に過ぎたり』

と斷ぜられ、如何に法華經を信じて、如何に御唱題を申しても謗法があつては必らず地獄に墮つると教へられて居る、この謗法に就て單り佛立講のみが八ヶ問敷云ふやうに思はれて居るが、これは必らずしも佛立講の特色といふ譯ではない、他

の日蓮宗では宗祖の禁を忘れて居るのである、日蓮聖人は

『正直捨方便と申して法華經を信ずる人は阿彌陀經等の阿彌陀佛、大日經等の眞言宗、阿含經等の律宗の二百五十戒等を切り捨て後、法華經をば持ち候なり』
とも申されて居る、則ち從來信仰せし佛菩薩等の本尊守札等を皆拂ひ清めることを謗法拂といふのであつて、これが出來なければ佛立講の信者ではない、單り佛立講の信者でないのみか、法華經の信者とは云へないのである、高祖の戒體即身成佛義に

『謗といふは但だ口を以て謗り、心を以て謗るのみ謗にあらず、法華經流布の國に生れて信ぜず、行ぜず即ち謗なり』

とありて、法華經の流布弘通を妨げ、又は法華經に背信の言行ある者は謗法である、單に口を以て謗り、心を以て謗るのみが謗法ではない、この道理の上から他の諸宗の神佛を見れば、悉く我法華經に信順せざるのみか、敵對して居るものである

から謗法と言ふべきである、開導上人の御教歌に

大君の御國に住みて大君をそしる如きを謗法といふ

とあるやうに、佛立講では高祖の御教戒に違ひ、大逆罪にも比ぶべき恐るべき罪科として居る、立正安國論に

『彼の萬祈を修せんよりは此一凶を禁ぜんには如かず矣』

と仰せられ、諸災の根元謗法にありとし、謗法退治に渾身の力をそゝがれたに拘らず、同じ日蓮聖人の門流にある人々が、謗法罪の大切なることを辨へざるは歎はしいことである

尙ほ謗法は自分だけ謗法の穢れを去つたゞけでは宣敷ない、他人に謗法不信の行爲あることを觀過したるものも亦與同罪といふ罪を作ることになる、宗祖聖人が四條金吾に與へられた御消息に

『心は日蓮に同意なれども身は別なれば與同罪のがれ難きの御事に候』

と申され、他人の謗法を見逸し開逸しにする罪は謗法と同罪であると教へられたのである、開導上人の御教歌に

謗法を見つゝ聞きつゝ責めざればわが身も同じ罰當るなり

謗法を責むるは菩薩責めざるは地獄へ落す鬼にぞありける

とあるは法華經を信行する我等の深く奉行すべきことである

信心修業に就て

佛立講の信心修業は自行と化他行との二つを備へねばならぬ、さうして身と口と意で信心修行することを自行の三業と稱へる、意に本尊は生身の如來であると信じ、身に尊敬の奉仕を懈らず、口に南無妙法蓮華經と唱へ奉る、その中でも口業の唱題を以て修業の正意とする、心が本意となると、さめたり熱したりして信心に斷續がある、殊に老幼男女賢愚で大變な相違を生ずる、それで心を本意とせず口業を正

意とするのである、口で妙法五字七字を唱ふるのが成佛の修行だとすれば老幼男女賢愚の差別はない、皆な平等に修業することが出来る、或る信者が日蓮聖人に『聖人の唱へさせ給ふ題目の功德と、我等が唱へ申す題目の功德と何程の多少候へきや』と御伺ひした時、聖人は

『更に勝劣あるべからず候、其故は愚者の持ちたる金も智者の持ちたる金も、愚者の燃せる火も、智者の燃せる火も其差別なきなり』

と答へられた、佛立講開導上人は殊に此の口唱正意を強調された方である

法の水結ぶ心は濁るとも口に唱ふる聲しすめらば

唱ふるが信心なれば唱へずに有難かるは信心でなし

自行を満すために又化他行をするのが佛立講の御教である、これを化他即自業と

いふ、自身が成佛する爲には、どうしても一切衆生を成佛の道に引き入れねばなら

ぬ、法界の一切衆生とは人類に限らず、禽獸虫魚の畜生道、餓鬼道、地獄道のもの

まで含むので誠に無邊の衆生である、これを悉く教化するには容易でない、そこで化他にも三業があり、慈悲を懷くは意業で、折伏の聲を發つは口業、弘通の爲めに東奔西走して憎まれ謗られ、或は打擲等を被るは身業である、開導上人の御教歌に

折伏は慈悲より出づる教なり我身の罪も遂にほろびん

折伏は人を憎まず高ぶらずあはれむ事を祖師の御本意

のりの爲め押し入れらるゝ牢獄は死しての後の淨土なりけり

かく慈悲の意を懷いて折伏苦行を成ずればそれが我身の罪滅しとなり、手柄とな

り、淨土參拜となる、さうして自行も單なる自行でなく、やがて又化他行となるの

である、化他即自行であり、自行即化他である、殊に口唱行はその及ぶ範圍が廣

いので口唱即化他ともなるのである

南無妙と唱ふる聲が世の人の耳に聞えて折伏となる

惜まるゝ心にかちて目に見えて供養參詣するが折伏

かくの如く自行と化他とが相即して遂に成佛の大目的が達成せられるのである
化他行は他を教化して此の妙法五字を受持口唱せしむることであるが、何故妙法
を受持せねばならぬかといふ問に對しては、妙法蓮華經は汝自身の名であるから、
これを受持せねばならぬと教化すべきである、開導上人の
妙法はわが佛性の名なりしをさかずば我といかで知らまし
人皆の心の名ぞと驚は法、法華經とつぐるなるらん
と教歌にある通り、あなたの佛性の名が妙法蓮華經であるといふことを教へるの
が教化で、これを下種の妙行といひ、日蓮聖人は下種の導師、妙法は下種の大法と
申すのである

八、正しい信仰の仕方と心得

三大秘法

正しい信仰は正しい宗教を、正しい信仰の仕方に依つて信仰することである、正
しい宗教とは如何なる宗教であるかに就ては、上に述べたことで、十分お分りにな
つたと思ふ、七難を即滅して福德圓滿、法悦に生き幸福の生活に入る爲めには、妙
法蓮華經にお縋りする外にはない、法華經が佛教中の第一位に置かれて居る有り難
い御教であり、法華經を信心することが、この末法の時代に於て災患苦惱を免れる
唯一つの近道であることは少しも疑ふ餘地がないのである
處が、如何に法華經を信行しても御利益を得られぬといふものがある、それは何
の爲めであるか、いふまでもなく、信仰の仕方を誤つて居るからである、信仰の仕

方、信仰の心得を誤つては、その信仰は徒勞に歸する、如何に南無妙法蓮華經を口唱しても、その信仰の仕方を辨へず、謗法の穢れがあつたのでは御利益を受くることは出来ないのである。

そこで、私共が先づ第一に心掛くべきことは何であるか、それに就て日蓮聖人が宗門の三大秘法として信心の方法と要綱とをお示しになつて居ることを知つて置くことが、信仰の根本であり、基礎である

元來、佛教を信心するといふことは三寶に歸依することである、三寶とは佛法僧である、即ちこの三寶に依つて佛様の廣大なる御智恵、御力、御徳等を自分の身に授けて頂くといふ事であるから、正しく定まつた修行の方法に依らねばならぬ
三大秘法とは、佛様が法華經をお説きになる時、始めてお明しになつた信心について最も大事な三つの要綱である、その三ヶ條とは、前にも述べたやうに

本門の本尊

本門の題目
本門の戒壇

の三つである、この三つを完全に守り行ふことが正しい信心の仕方である、若しこの中の一つを欠き一つを間違へても誠の信仰ではなくなることを忘れてはならぬ前にも述べたやうに本佛は唯だ一つである、大日如來とか、阿彌陀如來とか申すお方は、釋尊が權教を説かれた時に假の姿としてお示しになつたものである、これを本尊として居ることはその根本に於て間違つて居る、釋尊は本門の法華經に於て、本尊は久遠實成の本佛でなくてはならぬことを明にされて居る、本門の本尊以外に本尊とすべきものは斷じてないのである

本門の題目の中には佛教の一切が含まれて居ることは前に説いた通りである、このお題目の中には五重の玄義と云つて妙名、妙體、妙宗、妙用、妙教の五つのもものが具備されて居る、妙名とは妙法蓮華經といふ名前のこと、妙體とはその妙法が具

體的に具はつてゐるといふこと、妙宗とは妙法の尊さといふこと、妙用とは妙法の働き、妙教とは妙法の教といふのである、即ち題目の中には妙法の全體が含まれてゐるので、その題目を唱へることが、直に妙法の全體を我が身に受けることになるのである、そこで信心の方法として、日夜朝暮に御唱題する事が最も肝要である

本門の戒壇とは本尊をお祀りして置く壇を申すのであるが、戒壇といふことはなか／＼深い意味がある、この意味を辨へて置かねば正しい信仰といふことが出来なくなる

戒は『いましめ』である、方便教の時代にあつてはこの戒律といふことを八釜しく云つた、五戒十戒など、云つて佛教に歸依するといふことは戒律を守ることのやうに云はれて居た、然し本門の教では、左様な必要がなくなつた、その代りに信心の實際から、次の二つの戒を持たしむることになつた

一、本門の題目以外の迹權の宗旨にその身、口、意を汚さぬこと

二、身、口、意の三業に本門の題目を持つこと

第一の戒は前に説いた謗法である、謗法罪に墮することは絶対に戒めてある、正しい信仰に入るもの、最も大切なことは謗法を拂ふことである、謗法を十分に拂つて本尊をお祭りすることが、正しい信仰の戒壇であることを忘れてはならぬ

第二の戒は、『してはならぬ』事の反面に於ける『せねばならぬ』戒である、これも前に説いた自行及び化他の三業を堅持することである、法華經の第四の卷には

『一乗妙法蓮經の受持を以て戒法とす』

とあり、又寶塔偈には

『此の經は持ち難し、若し暫らくも持つ者は、我即ち歡喜す、諸佛も亦た然り、是の如きの人は諸佛の歎めたまふ所なり、是れ即ち勇猛なり、是れ即精進なり、是を戒を持ち、頭陀を信ずる者と名づく』

と申されてある、即ち御題目を持つ事が戒法である、そこで信心の方法としては、先づ一家中の清浄な處に戒壇を設け、御本尊を安置して御唱題をする、而かも謗法があつてはならぬ、身、口、意の三業を堅持して、三大秘法に背かぬやうにせねばならぬ、これが即ち正しい信仰に入るもの、根本である

この根本の意味を心得て、佛様の廣大無邊なる御力にお頼りすることが、正しい信仰に入る方法である、以下即ち正しい信仰の實際に就て、私共佛立講を信行するもの、必ず心得て置かねばならぬ肝心の事を、聊か申述べて見やう

御本尊に對する心得

法華經の御本尊が何であるかは既に詳しく述べた、そこで私共は御本尊に對して如何なる態度、如何なる心得がなくてはならぬかに就て一言する、佛様は之を一國にして見れば國王であり、一家にして見れば主人である、又その信者を教へ導き、信

者の苦を除いて樂を興へて下さるのは師匠が弟子に臨むが如く、親の子を育つるが如きものであると、いふ所から、主、師、親の三徳を兼ね備へらるゝと申すのである、そこで信者の御本尊に對する心得は、主師親に奉仕する心持を持つことが大切である、主に對しては忠、師に對しては敬順、親に對しては孝行でなくてはならぬやうな心持で奉仕すべきである

先づ毎日の行事としては、御戒壇を拭き清める、御水を供へる、御燈明をあげて、お線香を立て、敬虔な氣持で御唱題をする、といふやうに仕へねばならぬ、この美しい氣持、すがすがしい氣持で御唱題をする時には一切の苦惱を逃れて無限の幸福に浸ることが出来る、この悦びは信心するもの、みの享受する尊い有難い功德である

この心得なくして、唯だ徒らに自己の我慾を満たさんとするやうな信心では、絶對に御利益を受けることは出来ない

祈願の心得

信仰の目的は誰れしも佛様にお縋りして七難を即滅し、御利生を願ひ、幸福を得たいためである、それにはその事を御本尊に申上げて御願ひせねばならぬ、勿論、正しい信仰をするものは自然に御利生があり、法華經を受持する者には諸天善神の御加護があることは前に述べた通りである、けれども、祈願といふことも信心するものには大切なことである、宗祖大師の御鈔中にも、祈りとか祈禱とかの御言葉が澤山あるのみでなく、その御一代には、母上の御病氣を祈禱で御治しになつたり、蒙古を調伏されたりなされた實例が澤山ある

祈願とは祈り願ふことである、私共が斯くありたい、斯くして頂きたいと思ふことを御本尊に申上げて、御經力、御佛力の加護をお願ひすることである、併し、こゝで考へなければならぬことは、私共がいろ／＼な神社佛閣に唯だ無暗に祈願する

ことは全然無意味であり、決して御利生を得られるものではないといふことである、他の神佛は祈れば聞き届けてやるぞといふ御約束がない、聞いて頂けるものか、どうかは分つて居ない、處が法華經の中にはハッキリ御約束がある、この御約束を根據とした祈願である、日蓮聖人も身を以てその事を證明して居られる、左に一二の御書を挙げやう

「七難即滅、七福即生と祈らんにも此御經第一也、現世安穩と見えなければなり、他國侵逼の難、自界叛逆の難の御祈禱にも此の妙典に過ぎたるはなし、令百由旬内、無諸衰患と説れたればなり」(持法華問答抄)

「法華經と申す御經は身心の諸病の良藥なり、されば經に云く、此經は即ち爲れ閻浮提の人の病の良藥なり、若し人病ありて是の經を聞くことを得ば、病即ち消滅して不老不死ならん等云々又云く現世安穩にして後生善處ならん等云々」(太田左衛門尉御返事)

『法華經の行者の祈りのかなはぬ事はあるべからず、乃至、道理文證を拜見するに、まことに日月の天に御座すならば、大地に草木の生ふるならば、晝夜の國土にあるならば、大地だにも反覆せず、大海の潮だにも満ち干るならば、法華經を信ぜん人現世の祈り、後生の善處は疑ひなかるべし』(祈禱抄)

『大地をさす指ははづるゝとも、虚空をつなぐものはありとも、潮の満干ぬ事はありません、日は西より出づるとも、法華經の行者の祈りの叶はぬ事はあるべからず』(祈禱抄)

この外數へ來れば枚擧に違のないほど祈願の御利益に就ての御示しがある、祈願には別に方法といふものはない、たゞ謗法の穢れなく、御本尊に打ち向ひ奉つて南無妙法蓮華經と一心に口唱すれば必ず成就する、唯だこゝで注意すべきことは、祈願の際に餘念があつては宜敷ない、餘念なく祈願することが肝要である、開導上人の御教歌に

餘念なく妙法五字を唱ふればよろづの願ひなかに成就とある通り、一念を以て祈願すべきである、一念とは何か戀ひ慕ひ唱へ重ねし心より法の光りは顯れにけりと御教歌にある通り、御本尊を戀ひ慕ふといふ一念を以て口唱することである、これは法華經第六の卷、如來壽量品に『その心戀慕するに依りて乃ち出で、爲めに法を説く』とあるのに依られたもので、佛様を戀ひ慕ひ何卒御助け下されと祈願するから、佛様も出で、法を説かれるので、この戀慕の心が信の一字となるのである、信の一字が要中の要であるが、さればとて口唱がなくてはならぬ、信と口唱とは車の兩輪の如く、その一つを缺いても御利益を頂くことは出來ないのである

謗法拂ひの仕方

謗法とは如何なることであり、何故恐るべきであるかに就ては前に述べた、然る

に當講以外の日蓮宗では、この謗法といふことを餘り恐れぬ、さうして當講の謗法に對する態度を非難して氣が小さいとか、了簡が狭いとか申して居る、斯様な考へであるから、他の日蓮宗では御利益が頂けないのである。前に詳述した通り、謗法といふことは法華經の御教に從はず、信ぜぬことであつて、日蓮聖人もこの事に就て八釜しく申されてある、「法華經の敵を見ながら置いてせめずんば、師檀にも無間地獄は疑ひなかるべし」と御示しになつて、絶対に嚴禁して居られる、それに拘らず、平然として謗法を見過す者は例へ法華經の信者たりとも、眞の信者ではない、寧ろ法華經の敵である

そこで謗法を責めるにはどうしたらよいか、先づ我家の謗法を責めることが第一である、佛壇の眞中にある阿彌陀佛、觀世音、帝釋、毘沙門等を謗法として責めねばならぬ、これはそれ自身が悪いのではないが、謗法の僧等の手先に使はれるのが悪いのである、即ちこれ等の謗法を清めるために火に上げる、火で清めるのである、

さうして家中に一つの謗法の影もないやうになつたら、進んで兄弟親戚知己等を折伏し教化してその謗法を消滅せしめる、親戚知己の謗法を見ながら責めないのは、「置」の一字に觸れて與同罪になる、勿論他人のものに手を觸れる譯には行かないから、消滅してやることは出来ないが、聞入れる、入れぬに關らず責めるだけは責めねばならぬ、唯だ注意すべきは謗法のお札等を消滅するは必らず本人でなくてはならぬ、家人たりとも主人の承諾なしにすることは出来ない
或は、謗法は恐ろしいが、有るものを焼いたり流したりすることはないと、言ふ人があるかも知らぬ、然し、日蓮聖人は「大塔を建てる爲めには足代がある、建て、仕舞へば取拂はねばならぬ、法華經を持たんものは從來の足代を正直に取り捨てねばならぬ」と仰せになつて居る、宗祖のこの教に從ふことは日蓮門下として當然のことではあるまいか
謗法拂ひの時には火に上げることが一番よい方法である、さうして特に注意して

丁重に取扱はねばならぬ、これに就て開導上人は

「信仰上の事は自由なりとて神札等もあらくなすには非ず、謗法拂等にも尊敬して世間上のさわりとならざる様に注意すべきものなり」

と申されて居る、よく／＼心すべき事である、尙ほ謗法にまぎらはしきものは忌まねばならぬ、佛像や佛畫などを床の間に飾つて置くことは謹まねばならぬ

次にまぎららしいものは神社のお札である、元來神社といふものは國家に功勞のあつたお方をお祭りして、その生前の尊敬を永遠に傳ふるものであつて、これを宗教的に考ふべきものではない、日本の神々は決して佛敎や基督教でいふ神ではない、又、神社と神道とは自ら區別さるべきものであつて、所謂、宗教團體としての神道は、天理敎とか、黒住敎とか、神理敎とかいふもので、我國古來つ神社とは別種のものである、これ等の神社が宗教的の行事に参加して守札などを出すことは、神社が佛敎の祈禱札を模倣したもので、明かに神社の宗教化である、これは寧ろ神社の

尊嚴を冒瀆するものではあるまいか、これ等のお札を紀ることは法華經の信者としてはいふ迄もなく謗法とまぎららしいものとして避けねばならぬ

助行と折伏

佛立講では助行といふことがある、助行とは正行に對する言葉で、末法の凡夫が成佛する根本はお題目を信唱することである、これを正因の行（正行）と稱へ、末法の正意とする、宗祖は「正行には唯南無妙法蓮華經也」と示されてある、この正行に對して謗意の行、助縁の修行をすることを助行と云ふのである、即ち「所詮末法に入て天真獨朗の法門無益なり、助行には用ふべし」と示されてある、天真獨朗といふは天台大師の敎へ給ふた一念三千の觀法修行であつて、これは智者の修行であるから、末法愚者多き世には無益である、けれども愚者の中でも多少の智者がないでもない、それ等の人々が正意にお題目を修行し傍らこの行をしてもよい、そ

れが正行を助ける助行となるのである

所詮助行とは、成佛の正因修行を全ふせしむる爲め、障害を除き又は援助を加へて信心が増進する様にする修行をいふのである、即ちお題目を口唱することが正行、この正行を喜び勇んで出来る様に如説修行抄をあげる、如説修行抄は助行である、助行は直接成佛の因とはならぬのである

當講で助行といふは御祈願の時の助行の人を指すのである、正行の人は願主であり、この願主が一心になるやうに仕向けてやる、これが助行である、助行には二つの方法がある、一つは折伏を加へて貰ふことであり、二つは連れ立つて唱へて貰ふことである

御願ひせねばならぬ程の病氣災難の發つて来るのは謗法があるからである、さればその謗法を拂はねば御利益は頂けない、所が燈臺下暗して自分の悪いことは自分には分らぬ、かゝる場合に他から折伏して貰ふことが必要である、これが助行の第一

である、謗法の穴があるから口唱しても御利益とならぬ、病氣災難の時は日頃の信心に謗法の穴のある所を考へて直に改良し懺悔して口唱を勵むことが肝要である
「折伏なければ當流の法門にあらず」との御指南と「その折伏も信を本として起りたるが折伏也」との御指南とをよく辨へねばならぬ

然らば折伏の仕方を如何にすべきか、如何の方法にて折伏行を努むべきかに就て日扇上人は開化要談體の卷に

「折伏の仕様に二様あり、譬へば犬に當らぬやうに棒をふるのと、鼻柱をねらふてなぐるの二つなり、同じ當流の面折とは云へども臆病折伏、諂曲折伏あり、これは御抄に遊ばしたる法華經の敵と仰せられたる折伏也、名は折伏にして心は隨他意、御太鼓折伏なんにもならぬと云ふ折伏なれば臆病なり、諂曲なり、犬に當らぬ様に棒をふる意なり、なぐるに非ず助くるなり、こらすに非ず、かゝるなり、良薬は口に苦し、金言耳に逆ふ、無間地獄へ落すが不便と、助けたさが先に

たちて死ぬるならば早くしね、生きて謗罪を積んよりは毒鼓の縁にだもと面折するが、かぶりつくのなら、かぶり付けと鼻柱をねらふて眞向になぐる意なり、これを當流の折伏とは申すなり』

とありて、隨他意の折伏は名折伏にして眞の折伏にあらざるを説き示され、その根本を信に置き、心を慈悲に置いて法律に違背せぬ様心がけて進まねばならぬ

茲に注意すべきは、何でも折伏と振りかざして十人十色の折伏をなし、標準も統一もない折伏には何等の確信もない、自ら確信のない折伏を他に推さんとするも何の功能もない、折伏は常に標準たるべき定規に據らねばならぬ、定規とはいふ迄もなく御法門であり、御指南であり、御教歌である、開導上人の御教訓を基として、これに背かぬ折伏にして始めて信を以て他に推すことが出来る、これは實にわれ等信徒の戒心すべき要點である

助行の第二の要件は一所にお題目を唱へてあげることである、已に折伏して悪い

處を改良させた以上、祈願成就の處まで共同責任で、連れ立つて唱題してあげねばならぬ、そこに助行の終局の目的は達せられるのである

助行を受くる人の心得に就ては、日扇上人が明瞭に開化要談にお示しになつて居る

『口すぎの爲に拜みあるく者を頼むべからず、御利益なし

病家の心得には、助行に来て下されたる信者を敬ひ思ふこと、高祖御來臨の思ひをなすべし、遠方より參れるも、又時過ぎたるにも御空腹させ申さぬ様御供養申すべし、相互なりと思ひて、相互に心安く輕卒にすれば更に御利生はなきものなり

貧家にて其事の叶はぬは心で敬ふべし、又助行の人も、もとより慈悲なれば供養を受くる心更になし、蠟燭、香等、持參する人もあり、出来る家にてせぬは貪慾なり、利生なき也』

助行者を敬ふ心が薄ければ御利益は頂かれない、御祖師様が私を助けに来て下さった御祖師様の御名代が御出で下さつたのだと敬はねばならぬ、開導上人の御教歌に

あさましの我等の祈りかなへるはまたく御法の力なりけり
謗法を拂ふくすりのよくきゝて重き病のなほる妙法
折伏をする人ならばわが祖師の乗りうつります御弟子なりけり
とあるは、よくく味ふべきである

御講と御法門

御講といふは佛立講の成り立つ上に極めて大切なことであつて、講の字は解説教導の義なりと御指南にある通り、信者の行くべき道をお教へ下さるのが御講である、日扇上人が安政四年正月十二日佛立講を立宗遊ばされた御趣旨はこの法華經は下

根下機の今日と雖も講演する杯のことは出来ない、説き手はあつても聞き手が無い、されば法華講演に代ふるに、法華の肝心、題目の五字を講讃するのが時機相應なりと御悟りになつて、お題目の有り難いことを説き勧められたのである、御講は御題目の有り難いことを信者に説き聞かせるのが目的である、これを聴聞なされた方は信心が増し、間違つた考へは改良される、さうして一人の信心改良が大勢の人々に利益を施す、その功德の程は量り知られぬのである

御講席に於て多くの信者を供養し、先に亡くなつた諸靈及び法界の群靈を回向し、組内信者の異體同心を許る等、皆な御講の力と申さねばならぬ
講中となつて御講にまゐらねば講の外なる人にかはらず

と御示しになつて居るやうに當講に入講した人は講中として是非とも御講に出て聴聞せねばならぬ、御講席は教務と信者、古い信者と新しい信者、役中と平信者など狭い座席に膝つき合はして一所に御看經をしたり、一所に御供養を頂戴したり、

又その前後に信心上の話を交換するので自然の中に異體同心となつて来る、「異體同心なれば萬事を成ず」とは宗祖大師の金言である。

御法門といふは佛のお悟りに到達せんとする者のくゞらねばならぬ佛法の門である、法華經第二の卷に「佛敎の門を以て三界の苦を出で、涅槃の樂を得」といふところが説いてある、佛敎の門を以ては佛法の門を以てと同じ意味である、この佛法の門をくゞりさへすれば、そこは現世安穩の庭園であり、その樂園を歩いて行くと極樂淨土の御殿に達する。

佛法の門には三つの門がある、第一は權敎の門であり、第二は迹門であり、第三は本門である、法華經以前の權敎は恰かも道に迷へる參詣者に大體の方向を指示し示すと同じく、佛の悟りのあらましの入口を教ふるものである、これを權門と云ひ、二の鳥居が迹門である、迹はあしあとの義で、本ものによく似た影のやうなものである、この迹門を通つて本門に入り、これを通れば佛様のまします本殿に達するの

である、法華經方便品に「信を以て入ることを得たり己が智分にあらず」とある通り、この門をくゞるには信心といふ姿勢で行かねばならぬ、不信謗法のものとは斷じて入ることを許されぬ。

法の門をくゞるとは佛法の旋をよく守ることである、よく守る爲めにはよく聞かねばならぬ。

法門をきかぬ間は凡夫にて佛の智慧の出るよしなし。

と御敎歌にあるやうに、我見に執せず、佛の御悟りの智慧を戴かねばならぬ、それは御指南であり、御講席で承る御法門である、御指南通りに修行するを法門を守ると申すのである、御指南通りの信心をするには御法門を覺えねばならぬ、よく心して聴聞して我に植え付けねばならぬ、開導上人の

「一日愚人と語へば一日の愚がうつる、一席御法門聴聞すれば大なる功德を得る、其きく所を忘れぬれば千金を落したるよりも損なり、これを知る人信者なり」

と仰せられた御言葉を信行して一心に法門を聴聞し、これを實行するといふ事に心を置かねばならぬ。

御供養に就て

御講には御供養はつきものである、供養といふのは佛法僧の三寶に香、華、お燈明とか飲食のものをお供へ申してお養ひ致すことである、佛様に對しては皆様が毎日なさつて居られるやうに御花を献じ、香を立てる、御水やお盛物を供へる、かくして三千年の昔、衆生が釋尊をお養ひ申上げたやうに、末法の今日に於てお仕へさせて頂くのである、僧にも亦その飲食、臥具、衣服等を供へ養ひ申さねばならぬ、法には法命と申して御法にも命がある、この法には法味を供へ養はねばならぬ、法味とは妙法口唱、講讚の功德、恭敬禮拜、弘通發展である。

供養は大別して財供養、法供養の二つとする、財供養とは香華燈明衣服飲食等で

ある、法供養は前に述べた法味ともいふべき如説の修行をして衆生を教化利益すること、精神的の供養である。

尙ほ御供養に就ての心得を申添へて置かう、先づ財供養の場合であるが、體裁や義理から、形式的に流れたり、自分の虚榮心を満たす爲めに無暗に澤山の供養をしたり、澤山に供養をしたから澤山の御利益が得られるだらうといふ、打算的の考へを持つことは絶対に慎まねばならぬ、そんな事は決して佛様の御心に叶ふものではない。

佛さまがお喜びになるものを差上げたい心持、僅かなものでも何卒納めて下さるやうにと願ふその真心が大切である、殊に供養は人頼みにするものではない、自身で鄭重に汚れないやうにしてさしあげべきである。

なほ、信者から師僧に對してする場合、信者から信者同志に對してする場合があるが、何れにしても、初めは御本尊の前にさへげて佛様に御供養する、それを佛様

から師僧へ、又は信者へ頂くといふのが正しい順序である、御供養の最も大切なことは、御佛にお仕へする純真な心持が何時でも根本であることを忘れてはならぬ。こゝで回向といふことについて一言して置かねばならぬ、回向とは死んだ人の追善供養をすることである、回向の字義は回はまはす、めぐらすであり向はおもむき、むかふである、一言にして云へば「此方のものを向ふへやる」といふことで、大智度論には回向とは「少物を王に上るが如く、聲を回して角に入るゝが如し」と説いてある、自分の手許にあるものを王様に差上げると王様がお喜びになつて立身の基となる、即ち自分の心願成就のお願ひよりも、死んだお方の追善菩提の爲めにと口唱すれば功德は莫大であるといふのである。

功德は何處までも回はるものである、三寶にさへけた供養はやがて功德と變じて志す精靈に向ひ、更に轉じて果報となつて回向主に回り向ふのである、こゝに回向の尊い意義がある。

唱題と導師に對する心得

佛立講に於ては口業の唱題を以て修行の正意と致して居ることは前に説いた通りである。御題目を唱へるだけのことであるから、何でもない様であるが、これをその日／＼の勤めとして續けて行くことはなか／＼困難である、この困難に打ち克つて行くことが修行である、これを續ける爲めには次の五根と稱する根氣が大切である。

信根不疑
進根不退
念根不忘
定根不動
慧根不昧

即ち信じて疑はず、進んで退かず、心に念じて忘れず、心が定まつて動かかない、教へを聴聞して間違はないといふ五根が備はれば信行の目的は必ず成就する。

尚ほ信徒は導師に對する心得がなくてはならぬ、佛教を信心することは佛法僧の三寶に歸依することである、佛様と法に對する心得は既に説いた通りである、そこで最後に僧に對する心得がなくてはならぬ、僧は法の上の師匠である、信心に導いて下さる導師である。

導師としての第一の條件は正法を修する者である、正法を修する者とは法華經の教通りに修行してゐる者である、さうして三大秘法に従つてゐるかどうかといふことが大切である、如何に立派な人物でもそれが謗法であれば弟子も亦謗法罪に墮ちる、同じ法華宗の僧侶でも、信行の方法を間違へたり、謗法があつたりする者が非常に多いので、これ等の僧は導師としての資格がない。

信心の上から云へば師弟の關係は親子の間柄である、一度師として仰いだ以上は、

師をかへるといふことは慎むべきである、さうして常に

師の教へに従順なること

師を謗らぬこと

師を歎める事は讚佛の意となること

の三つのことを心得て、これに背かぬやうに心掛くべきである。

佛様の仰せには「佛道を求めてゐる者が、一劫（長い年月）の間に數限りなき言葉で佛を讚めたならば、その爲に量り知れぬ功德を得るであらう、然しこの法華經を弘め之を持つ者を歎めるのは、それ以上の福德が授かる、何故かと云ふに、佛は人を導いて下さるのに、自在の神通力をもつて居られるから、この法華經の大法を説いて、人々を手引して下さることも容易であるが、末法の世に、この法華經を弘める師匠は凡師であるから、佛のやうに人を導く自在神力を有たないので、人を導くといふことは容易でない、實に非常な努力を要する、易々と出来る者を讚めるよ

りも、困難と戦つて骨を折つてやつた者を讃める方が遙に善い事であるから、それに酬はれる功德もはるかに多い」と御教へになつて居る、この理を心に記して導師に對することが、信徒たらん者の甚だ肝要なことである。

九、なぜ病難死苦をのがれるか

上來、私の説いたことを十分に玩味せられて妙法を信行すれば必ずや御利益を頂くことが出来る、七難を即滅して無限の幸福を招徠することが出来る、人生のあらゆる苦患は立ちどころに消滅して現當二世の利益に預ることが出来る。

斯様に申したとて、不信の人々は、どうして妙法を信行すれば御利益を頂けるかに疑ひを持たれるであらう、そこで、重複になるやうだが、最後にこの事に就て一言するの無駄ではあるまい。

人の一生は、殆んど苦の連続である、憂ひ悲みは人の世の定業である、一家のこと、一國のこと、商賣のこと、職業のこと、病氣や災難は勿論のこと次ぎから次にいろ／＼の苦惱が絶えないのが人の一生である、この苦惱に打ち克つて行くといふ

は容易なことではない、そこには信心の有り難さがある、信心をして居る者は、佛様の自在神力に依る御加護を受けて居るといふ信念がある、日蓮聖人が首の座に据つても平然として、「妙法の爲めに自分の命を捧げるのは、糞と黄金とを取換へるやうなものだ、こんな結構なことはない」といつて些しも動じなかつた、あの強い信念は正しい信仰に生きる者のみの、持ち得る強さであり、勇猛心である。

この勇猛心は如何なる艱難も苦患も必ず克服して安心を與へる、何時でも相見えて相笑ふことが出来る、愉快に、朗かに、豊かな氣持で人生に處することが出来る。

平穩無事の日には、頗る樂天的な人も、一旦異變に遭遇すると、平素の心構は忽ちにして覆へされて、風曇甚だ險惡になるのが、信仰を持たない人の常である、正しい信仰に生きる者は泰山前にくづるともびくともしないだけの覺悟が出来て居る、この覺悟があらゆる御利益の根源である。

こゝで一言述べて置かねばならぬことは、因果の道理である、因果の道理とは平

易に言へば原因結果である、佛敎ではこれを因果應報とも申して居る、世の中の事はすべて偶然に起るものはないのである、春になつて花が開き、秋が来て葉が落ちるのも、日が東から出て西に入るのも、ことごとく因果の道理に支配されて居る、私が前にのべた宇宙間の無形の偉大なる力に支配されて居る、この力は宇宙の一切を支配して居るので、人の一生も亦この力の支配を免るゝことは出来ない、如何に文化が進んでも、如何に科學が進んでも、この力を動かすことは出来ない、身體が弱いといふことも、病氣をすることも、貧乏をして苦しむのも、煩悶をするのも、苦惱するものも、そこに必ず原因があつてこの結果を生むのである、惡因があれば惡果を生み、善因があれば善果を來すのが宇宙の眞理である。今日の幸福は過去の善因に依つて生れ、今日の不幸は過去の惡因に依つて生れたのである、これと同じ道理で、現在は不幸であつても、善因をつくつて置けば、必ず將來には善果を生じて幸福になる、現在幸福であることに安心して惡因をつくれれば他日必ず不幸が生れる

といふことは、宇宙の一大真理である、これを佛教では本末一理とも申して居る、人の運命には必ず本と末とのあることをいつたものである。

この因果の道理、この偉大なる力の存在を知らぬ人は離苦得樂の御利益を受けることは出来ない、この道理を知るといふことは常識や學問上の智識ではない、あの機巧な人がとか、又あれほどの學者がとか、その結果から見ても不思議に思ふ例が少くないのであるが、これ等の人々は佛法上の智者ではない、愚かな人であり、無明の人である、換言すれば世間的の智識はあつても佛法の真理、人生の大道を體得して居ないからである、正法に依る正しい信仰に入つてゐないからである。

處が世間には「惡が榮えて善が虐げられる」といふ言葉がある、「あんな惡人が幸福であるのはどういふものだ」とか「あんな正直な人があんな不幸に落ちるのは神も佛もないのであらう」といふ様な實例が多い、これでは因果の道理に外れて居るやうであるが、決してさうではない、惡人が榮えて居るのは前生の善因の結果、善果

が生れて幸であるが、現在、その善果に乗じて惡因を積みつゝあるので未來は必ず惡果に苦しめられるといふことを忘れてはならぬ。善人が不幸に泣いて居るのも亦前生の因果である、然し、その人が現在の不幸に敗けないで善因を積みれば必ず將來は善果が生れる、現世でその結果が來なければ來世では必ず救はれる、この理窟が分れば神や佛を怨むことはないのである。

如何なるかこれ善因であり、如何なるかこれ惡因であるかは妙法に歸依して正しい信仰に生きるものにして始めて體得することか出来るのである、そこに信心するものと不信のものとの幸不幸が別れる、前世の惡因を絶ち、來世の善因を積むといふことは正しい信仰を持てる人のみの辿り得る人生の大道である。

善因を作るといふ事は妙法に歸依して正しい信仰を修行することである、妙法は諸法中の王であつて善中の善である、その功德は廣大にして測り知ることが出来ない、その偉大なる現證の利益は説き去り説き來つた處で十分お判りになつて居るこ

と、思ふ、そこでこの根本の道理を辨へて、善因を積むことに精進したならば、七難即滅、七福即生の御利益を頂くことは些しも疑ふべき餘地がないのである、即身成佛、不老不死の生活に遊樂することに相違ないのである。

十、即身成佛

日蓮聖人は「佛法は自他宗異なりと雖も、翫ふ本意は道俗貴賤共に離苦得樂、現當二世の爲なり」と仰せられて居る、我等凡夫の住む世界は弊惡充滿の火宅である、そこで念佛宗では捨身往生といふ教を説いて早くこの身を捨て、阿彌陀佛の御膝元へ參れるやうにお願ひせよと教へるが、日蓮聖人は、これは眞の佛の教ではない、方便の教へである、眞實の法華經の教へは即身成佛であると、お示しになつて居る即身成佛は捨身往生の反對で、身に即して佛を成ずるといふことである。

即ち我等の心に具はつて居る佛性を開顯するやうに下種して、その自在の神力を發揚させ、常住不滅、不老不死の生活にはいれるやうに導いて頂くことが、信仰の眼目である、さうして下種された時直ぐに佛になれるが、それではまだ完全な佛で

はない、それからいろ／＼の佛の段階を踏んで究竟即の佛まで進んで行く、この究竟即の佛が完成された佛である、どうしてこゝまで進んで行くかといふに、慈悲充滿の佛は衆生濟度をする外に樂みはないのである、佛立講の開導上人は「衆生の爲めに苦しむを樂しむとし給ふ」と教へられて居るやうに、どんな佛でも末法の今日に出現される時は菩薩の姿である、佛果の位から、佛因の菩薩界に向ひ、人間界に我等凡夫と同じ姿を現はされる、この人間と同じ姿になつて衆生救助の菩薩行をお積みになることが佛の樂みである、樂みを樂みつゝ進んで行くのである。

佛の住み給ふ世界を寂光淨土といふ、處が法華經には「本佛は常に此の娑婆世界にあり」と説かれてある、寂光淨土は念佛宗で唱へるやうに西方十萬億土ではない、この娑婆の外に寂光淨土はないのである。妙樂大師が「豈に伽耶(娑婆世界の別名)を離れて別に常寂を求めんや」と仰せられて居るのもこの理である、又日蓮聖人は「今本時の娑婆世界は三災を離れ、四劫を出でたる常住の淨土なり」と御教へにな

つて居ることである、明かである、開導上人の御教歌に

寂光の都と娑婆を思ふ故、けふも御法に遊びくらしつ

とあるのは、この意味を御示しになつたものである、之れを要するに無智の信心に安住して、南無妙法蓮華經と口唱し、妙法の功力を以て一切衆生を折伏成佛させるのが佛立講の信仰である、離苦得樂の正しい信仰に入らんとする人々は直に當講に入つて現證の御利益を頂かれるやうに、切に／＼お勧めする。

開導上人の御教歌

幸に智慧なき身こそうれしけれ、しらす本化の菩薩なりけり